

伊能忠敬研究

研究

史料と伊能図

二〇一二年

第六七号

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.67 2012

伊能図の旅

大図第四〇号

野辺地



伊能大図第40号野辺地(アメリカ議会図書館蔵)

測線と50万分の1地図との重ね合わせ図（東京カートグラフィック猪原氏作成）
図中○印は宿泊地、×印は同年復路宿泊地

下北半島
享保元年の第二次測量では、東日本の海岸線を北上し、三陸沿岸を測量して八戸から下北半島を廻った。十月の下旬である。雪の降る季節となつていて、十二日には浜三沢村（現三沢市）に到着し、次の平沼村まで長距離のため、弟子に途中まで測らせて浜三沢村に止宿した。晴れていたので夜間の天測を行つた頃から天気が悪くなり雪が降り出す。翌朝に雪は止むが、十センチメートルほどの積雪となつた。

翌日浜三沢村を出立するが、大吹雪となり、測量どころではなくなり、忠敬は駕籠に乗つたが、駕籠の戸障子も吹き飛び、駕籠の中も外も同じ状態になつてしまつた。ようやくのことでは平沼村に着いた。測量日記には、この程度の記述しかないが、

鈴木牧之の「北越雪譜」を読むと、この時代の吹雪の中での歩行は大変危険を伴つたことが窺い知れ、忠敬一行もまさに生命を賭しての測量行ではなかつたかと思ひ知らされるのである。この後、毎日のようになに降雪があり、その中で測量を遂行していることに驚かざるを得ない。

下北半島を周回し、二十三日には田名部に着いた。測量日記には、田名部は奥北にはまれな文化の町であり、町の主だつた人々は学文を好み、詩歌等を嗜むと書いている。江戸時代の町人文化の高さと地方にも伝播していたことの一端を示しているように思われる。

二十七日には、野辺地に到着し、その後青森、三厩まで測量して引き返した。（星埜）

木曾福島

木曾路

中山道の賀川宿(長野県塩尻市)から馬込宿(岐阜県中津川市)までの十
一宿の区間を木曾路と呼んでいる。木曾路は、木曾川の深い谷に沿つた
街道で、鳥居峠と馬籠峠を越える難路であった。伊能測量隊は、第七次
測量の往路において、文化六(二八〇九年十月一日)中山道本山宿を出立し、
木曾路に入り、賀川宿、奈良井宿(止宿)、藪原宿から鳥井峠を越え、宮
腰峠(止宿)、三富野宿(止宿)、妻籠宿、野尻宿(止宿)、須原宿(止宿)、上松
(止宿)、須原宿(止宿)、野尻宿(止宿)、福島宿(止宿)に八日
に到着した。馬籠宿から忠敬本隊は岩村城下に向かい、坂部貢兵衛支隊
は、中津川宿へと向かつた。

伊能大図を見ると、測線が細かく折れているところが随所に見られる。
木曾谷には、河岸段丘が見られ、宿場は段丘の上に発達しているが、そ
の間には河岸が狭い先行谷が見られる、このような河岸の狭い場所では、
上り下りと見通しが悪く、長い距離を測ることができなかつたのである
う。段丘状の測線は比較的滑らかである。

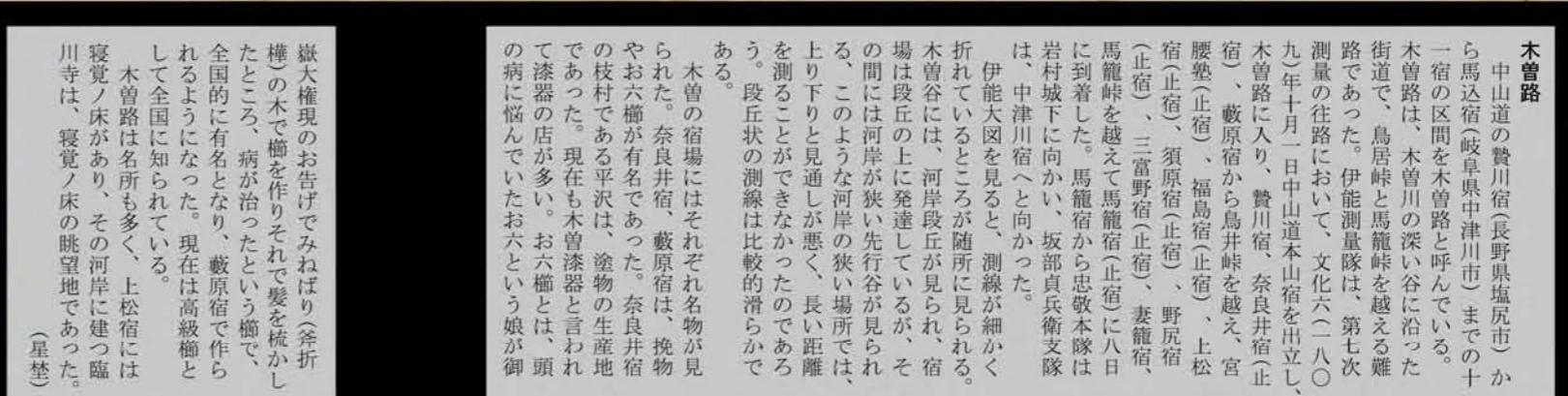
木曾の宿場には、それぞれ名物が見
られた。奈良井宿、藪原宿は、挽物
やお六櫛が有名であった。奈良井宿
の枝村である平沢は、塗物の生産地
であつた。現在も木曾漆器と言わ
れて漆器の店が多い。お六櫛とは、頭
の病に悩んでいたお六という娘が御
ある。

木曾路には、それぞれ名物が見
られた。奈良井宿、藪原宿は、挽物
やお六櫛が有名であった。奈良井宿
の枝村である平沢は、塗物の生産地
であつた。現在も木曾漆器と言わ
れて漆器の店が多い。お六櫛とは、頭
の病に悩んでいたお六という娘が御
ある。

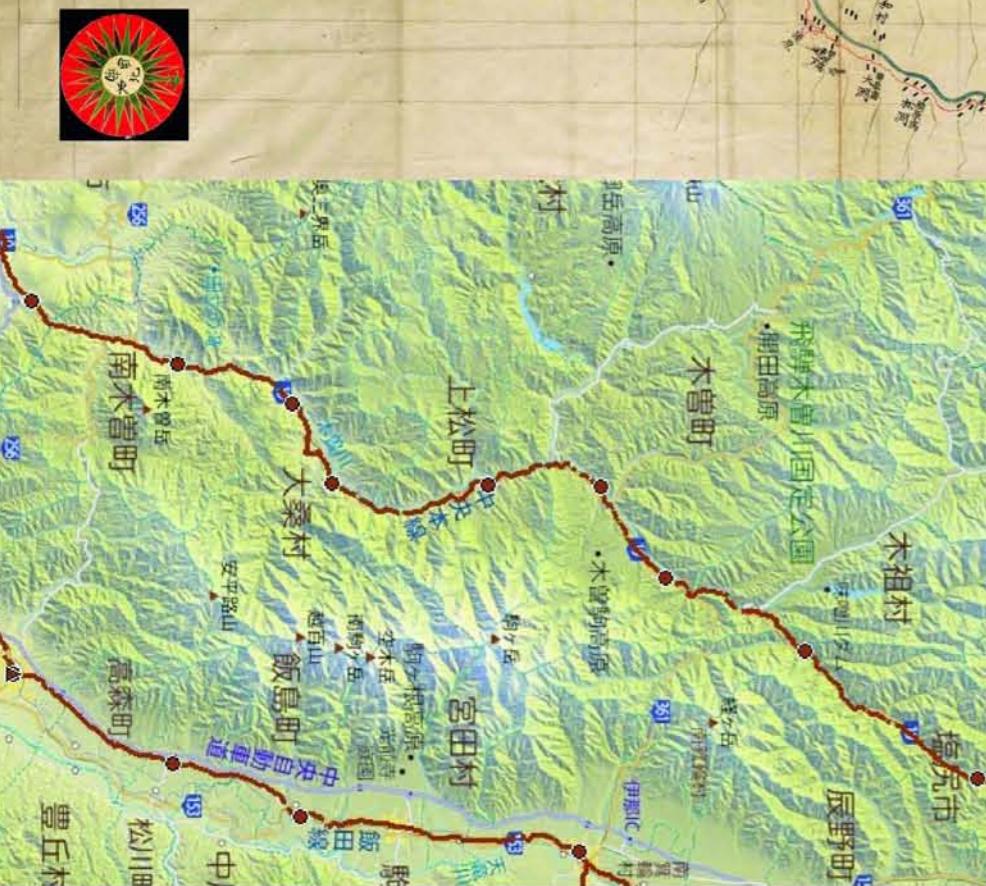
(星埜)



伊能中図第109図木曾福島(アメリカ議会図書館蔵)



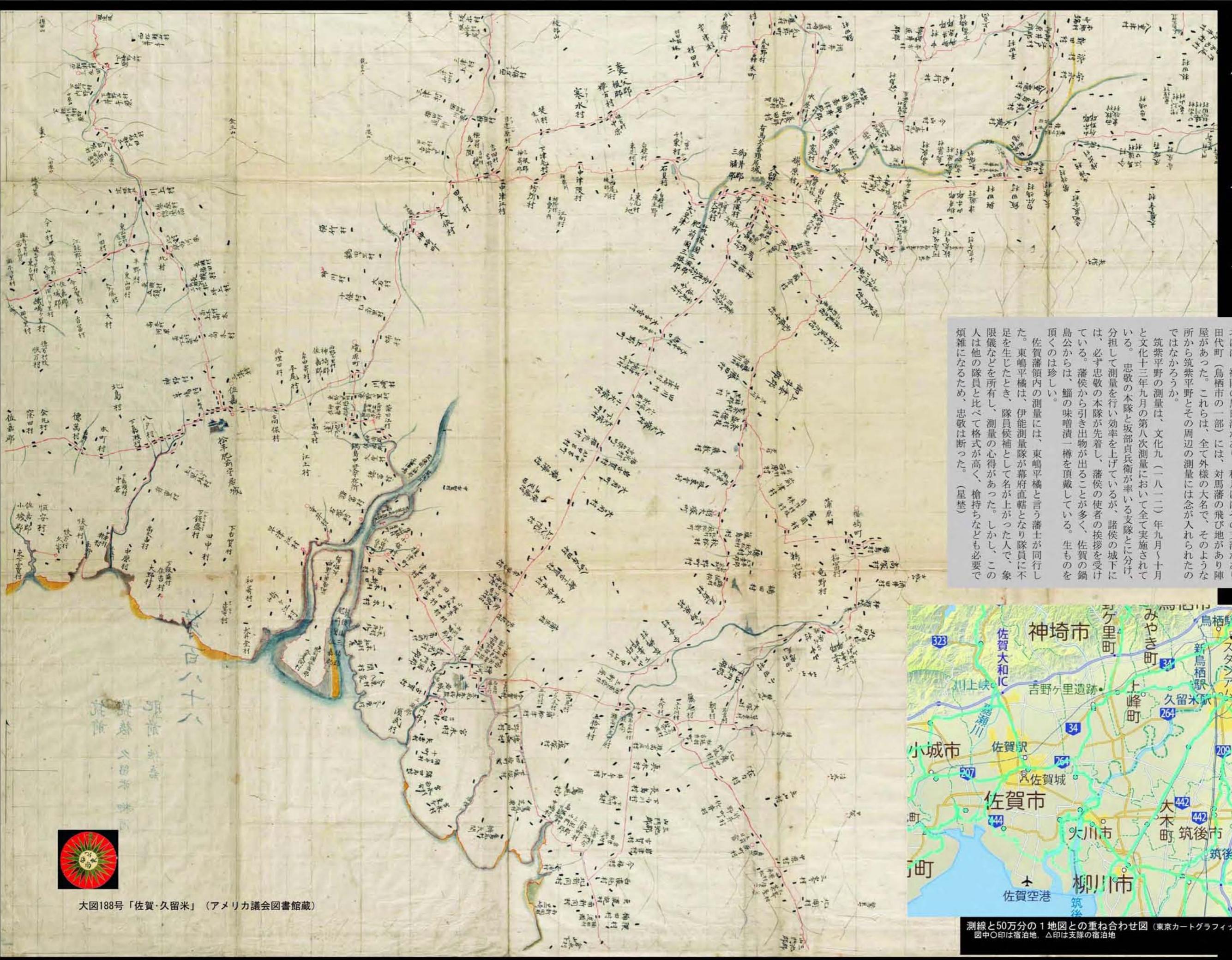
測線と50万分の1地図との重ね合わせ図(東京カートグラフィック猪原氏作成)
図中○印は宿泊地



測線と50万分の1地図との重ね合わせ図(東京カートグラフィック猪原氏作成)
図中○印は宿泊地

佐賀・久留米

大図百八十八号



大図188号「佐賀・久留米」（アメリカ議会図書館蔵）

筑紫平野

筑紫平野は、伊能全国測量において最も詳しく測量され、詳細な地図が描かれた地域のひとつである。筑紫平野には、久留米、柳川、佐賀には有馬、立花、鍋島の大藩の城下があり、蓮池、小城には鍋島の支藩があつた。北には、福岡の黒田藩があり、秋月にはその支藩があり、田代町（鳥栖市の一部）には、対馬藩の飛び地があり陣屋があつた。これらは、全て外様の大名で、そのような所から筑紫平野とその周辺の測量には念が入れられたのではないかろうか。

筑紫平野の測量は、文化九（一八一二）年九月～十月と文化十三年九月の第八次測量において全て実施されている。忠敬の本隊と坂部貞兵衛が率いる支隊とに分け、分担して測量を行い効率を上げているが、諸侯の城下には、必ず忠敬の本隊が先着し、藩侯の使者の挨拶を受けている。藩侯から引き出物が出ることが多く、佐賀の鍋島公からは、鰯の味噌漬一樽を頂戴している。生ものを頂くのは珍しい。

佐賀藩領内の測量には、東嶋平橋と言う藩士が同行した。東嶋平橋は、伊能測量隊が幕府直轄となり隊員に不足を生じたとき、隊員候補として名が上がった人で、象限儀などを所有し、測量の心得があった。しかし、この人は他の隊員と比べて格式が高く、槍持ちなども必要で煩雑になるため、忠敬は断つた。（星楚）



測線と50万分の1地図との重ね合わせ図（東京カートグラフィック猪原氏作成）
団中印は宿泊地、△印は支隊の宿泊地

高橋（景保）御用日記（二）

安藤由紀子

（解説）本稿は、伊能忠敬記念館所蔵の高橋景保の御用日記解説である。研究会発足以前に、記念館の委嘱で故安藤由紀子さんと伊能陽子さんが協力して、解説されたものである。

文化二年、文化三年の測量御用に関し、景保から若年寄への上申書、忠敬との間で送受した文書の控等が記されており、天文方で作成された正式記録と考えていいだろう。

それがどうして伊能家に伝えられたかはよくわからぬ。跡を繼いだ孫の忠誨（ただのり）が借用してそのままになつたのであろうか。

星埜代表が入力の労をとつていただいたので、順次整理して史料として掲載したいと思う。文言の整理と注記は渡辺一郎が担当した。

解説文の欠落がかなりあることがわかつたが、後日補綴することにして前に進めたいと思う。

なお原文のなかで、薄墨色の背景色部分は景保が記述した部分、淡黄色の背景色部分は景保が引用して控えた部分である。（渡辺）

*

一 翌十九日 間清市郎 足立左内等旅宿江罷越 大坂市中測量道順等終日目論見候由
一 廿日大坂市中測量道順 左之通相認 佐久間備後守御役宅江貞兵衛持參 公用人桜井菌右衛門を以差出候由

本紙のり入半切二認上包なし
(表書) 大坂市中測量之道筋申上候書付

伊能勘解由

八月廿日

廿二日 牛嶋（ママ）新田 住屋新田 三軒屋町 勘介嶋 番所前也 難波村 西側町 南堀江北江 長堀川北側東江 住屋橋南江渡り 高臺橋渡り 北堀江北江 問屋橋渡り 上繫橋渡り 長堀川 南側東江 北浜同所西江 川崎村 右破屋敷迄 夫より二筋西北木幡町北江蟠龍院角二て止廿三日 長町九丁目より始北江日本橋渡り 堺筋北江今橋同所東江 今橋渡京橋六丁目東江八軒屋京橋江 京橋渡り相生西町東江 野田橋渡り村境迄 右之通兩日二測量仕候二付 其道筋町役人罷出致案内差支無之様仕度奉存候 尤 雨天二御座候得は日送リ二測量仕候間 此段右道筋江被仰渡可被下候 以上

伊能勘解由

右届之趣致承知 夫々江可申渡旨備後守口上を以相答

此度西国筋國々測量御用被仰付今般当地着仕候 右二付当所市中左之道順ニ測量仕候

右坂部貞兵衛持參 用人菌右衛門江相渡 暫く相待居可申旨申聞ニ付扣居候處 暫して罷出菌右衛門申聞候ハ 千嶋新田より三軒屋辺勘介嶋迄ハ御代官支配ニ有之候間 御代官江可致通達義ニ候得共是迄御代官江ハ御触有之 差支茂無之 且堺より千嶋新田迄之御振合も可有之旨申聞候ニ付右道筋通行之趣申渡置候旨相答候処 左候ハ、此方より御代官江通達ニも及申間敷旨申聞ル

測量日記では坂部が届けに出たとあるだけで簡単だが、ここでは一部代官支配地があるよと注意される。先触れで申し渡してあると伝えて、それなら届けなくともいいだろうとなつた。

貞兵衛申候ハ 当願千嶋新田江相越候ニハ旅宿より直ニ船ニテ相越 夫より千嶋新田陸路通り測量致度旨申談候処 菌右衛門申聞候ハ 左候ハ、御用船差出可申候間

船でゆきたいと希望を述べる。それなら御用船を提供します。どんな船を何隻何処へ出しますか。何処を測つていても結構ですが、往來の障害で測量に差し支えがでては奉行の落ち度になるので、市内の測量ルートはお知らせください。

何船何艘何連之浜江何時ニ差出可申旨 断書前日ニ差出可申旨申聞候由 猶又貞兵衛承リ候ハ間五郎兵衛宅ニおひて夜分測量校測いたし候ニ付 夜分五郎兵衛宅へ兩三夜も罷越申候 且天王寺清水其外天満等江山々見通シ測合等ニ相越候旨相呴候処 隨分不苦勝手次第相越候様 只市中ニテ測量ニ候ハハ往来障等有之候てハ奉行之不念ニ相成候間 其度々御通達有之候様 其外御勝手次第たるべく旨申聞候由

<p>候ニ付退散 旅宿江罷帰リ直様何茂打連、間五郎兵衛 宅江罷越候由</p> <p>一 八月廿一日明廿二日 千嶋新田より測量相始メ候 二付旅宿より直ニ乗船ニテ千嶋新田江相越度間、断書 付左之通相認西町奉行所江差出ス</p> <p>坂部が早速配船依頼の書付を持参する。二人乗り屋形船と供船一艘では駕籠の代わりにしかならないが、測量隊側からのお願いとしては珍しい。</p> <p>（上部書入レ）のり入半切、上包なし</p> <p>測量御用ニ付船断 伊能勘解由</p> <p>一 式人乗屋形船 壱艘 外供船壹艘</p> <p>右は測量御用ニ付 尼ヶ崎橋より乗船木津川筋千嶋新 田迄罷越候間 明廿二日明ケ六ツ時尼ヶ崎橋浜江相廻 リ候様被仰渡可被下候 以上</p> <p>八月廿一日</p> <p>伊能勘解由</p> <p>右貞兵衛持參 取次瀧田陽助江相渡ス</p> <p>一 八月廿二日 廿三日前書道順之通り測量無滞相済 候由</p> <p>一 来ル晦日大坂表出立ニ付左之通先触遣候由</p> <p>明晦日大阪出立 野田村守口駅迄、京街道迄淀川堤縁 通りと 両道手分ニテ測量 夫より淀川堤通り左之泊 順ニ相越候間 宿用意可有之候</p> <p>且 国郡村名 村高 家数 領主性名（ママ）御朱印 地 重立候寺社 名所 旧跡等壹紙ニ相認 通行先江 差出可被申候</p> <p>一人足 御證文</p> <p>同</p> <p>覚</p> <p>一 人足</p> <p>宇治川二徒ひ 伏見迄 右宿々</p>
<p>市野金助</p> <p>右病氣ニ付江戸表伺済之通 大坂表より致帰府候間 御證文金助江被下候馬壹疋は、追て金助病氣全快之 上 猶又御用相勤候迄者差出不及候</p> <p>丑 八月</p> <p>伊能勘解由印</p> <p>金助は病氣だから、お証文にある馬一匹を出さなく てよいとこのようない断書を、お証文に添えて流した。</p> <p>大坂より京都迄泊触左之通</p> <p>明晦日大阪出立 野田村守口駅迄、京街道迄淀川堤縁 通りと 両道手分ニテ測量 夫より淀川堤通り左之泊 順ニ相越候間 宿用意可有之候</p> <p>且 国郡村名 村高 家数 領主性名（ママ）御朱印 地 重立候寺社 名所 旧跡等壹紙ニ相認 通行先江 差出可被申候</p>
<p>市野金助</p> <p>右病氣ニ付江戸表伺済之通 大坂表より致帰府候間 御證文金助江被下候馬壹疋は、追て金助病氣全快之 上 猶又御用相勤候迄者差出不及候</p> <p>丑 八月</p> <p>伊能勘解由印</p> <p>金助は病氣だから、お証文にある馬一匹を出さなく てよいとこのようない断書を、お証文に添えて流した。</p> <p>大坂より京都迄泊触左之通</p> <p>明晦日大阪出立 野田村守口駅迄、京街道迄淀川堤縁 通りと 両道手分ニテ測量 夫より淀川堤通り左之泊 順ニ相越候間 宿用意可有之候</p> <p>且 国郡村名 村高 家数 領主性名（ママ）御朱印 地 重立候寺社 名所 旧跡等壹紙ニ相認 通行先江 差出可被申候</p>
<p>市野金助</p> <p>右病氣ニ付江戸表伺済之通 大坂表より致帰府候間 御證文金助江被下候馬壹疋は、追て金助病氣全快之 上 猶又御用相勤候迄者差出不及候</p> <p>丑 八月</p> <p>伊能勘解由印</p> <p>金助は病氣だから、お証文にある馬一匹を出さなく てよいとこのようない断書を、お証文に添えて流した。</p> <p>大坂より京都迄泊触左之通</p> <p>明晦日大阪出立 野田村守口駅迄、京街道迄淀川堤縁 通りと 両道手分ニテ測量 夫より淀川堤通り左之泊 順ニ相越候間 宿用意可有之候</p> <p>且 国郡村名 村高 家数 領主性名（ママ）御朱印 地 重立候寺社 名所 旧跡等壹紙ニ相認 通行先江 差出可被申候</p>
<p>市野金助</p> <p>右病氣ニ付江戸表伺済之通 大坂表より致帰府候間 御證文金助江被下候馬壹疋は、追て金助病氣全快之 上 猶又御用相勤候迄者差出不及候</p> <p>丑 八月</p> <p>伊能勘解由印</p> <p>金助は病氣だから、お証文にある馬一匹を出さなく てよいとこのようない断書を、お証文に添えて流した。</p> <p>大坂より京都迄泊触左之通</p> <p>明晦日大阪出立 野田村守口駅迄、京街道迄淀川堤縁 通りと 両道手分ニテ測量 夫より淀川堤通り左之泊 順ニ相越候間 宿用意可有之候</p> <p>且 国郡村名 村高 家数 領主性名（ママ）御朱印 地 重立候寺社 名所 旧跡等壹紙ニ相認 通行先江 差出可被申候</p>

*

同十八日

公事二付無印形

松
兵庫頭小
和泉守 印

一 登城左之御届ケ秋山松之亟を以攝津守殿江上ル

石
拂方御金奉行衆
中
柳
主膳正 印
左近將監
飛驒守 印(表書) 西国筋為測量御用罷越候私下役市野金助義病
氣二付帰着仕候段申上候書付

高橋作左衛門

此度西国筋為測量御用 伊能勘解由江差添罷越候私下
役市野金助儀 病氣二付去ル八月廿九日大坂表出立

昨十七日夕江戸表着仕候 依之此段御届申上候

以上

閏八月十八日

高橋作左衛門

一 旅御扶持方裏書左之通
表書之旅御扶持方拾石可被相渡候 断は本文有之候
以上

丑

閏八月

御歳奉行衆

名前同前略之

一 旅御扶持方裏書左之通
表書之旅御扶持方拾石可被相渡候 断は本文有之候
以上ここでテーマが変わる。先号で旅費の他隊員並み支
給に苦労する模様を記した追加隊員の下河辺政五郎に
手当、旅費が支給される。一 今日御金渡日二付 政五郎江被下候御手当等為請
取御金藏江同人罷出請取○手形御勘定所裏書左之通表書之金四拾七兩壹歩 銀七百五拾目可被相渡候
是本文有之候 以上閏八月
公事二付無印形
羽 藤右衛門
御用二付無印形
村 左太夫
金 潑兵衛 印
御用二付無印形
岡 八右衛門
河 甚五郎 印旅費をいただく大変さに驚く。払方御金奉行衆、御
歳奉行衆は勘定奉行のことではないかと思う。とい
うのは、当時の勘定奉行として分かつてゐる中川飛驒守、
柳生主膳正の名前があるからであるが、在席する全員
の印を押すなど、新人時代によくやらされた決裁文書
の持ち回りを想い出してしまつた。一 政五郎金子請取帰り候二付 直様相渡請取證文左
之通
一 請取申金銀之事
一 金拾七兩 雜用金
但壹ヶ月金壹兩之積十七ヶ月分次は途中で帰つた市野金助に旅費の過払い分を返せ
という話である。私儀先達て為測量御用西国筋江罷越候節雜用并御手当
金銀御扶持方等請取過之分可致返納、去ル十一日攝津
守殿被仰渡候段、先生被仰聞候旨御達被下 右返納之
義奉畏候 以上

文化二乙丑年閏八月

下河辺政五郎 印

高橋作左衛門殿

受取書を出す先が高橋景保であることは意外である。
旅費はお上から下されるもので、請求書とか領収書を
出す性質のお金ではないらしい。十七力月分合計で、五九両三分となる。一両を約二
十万円とすると約千二百万円。従者一人を雇つて召し
つれねばならないが、交通費は歩くのだから不要、わ
らじ錢だけで済む。宿泊はお定めの安い料金なので、
主従で一日三百文もあれば十分。十七力月五百日で三
〇両くらいしかからない。ざつと半分である。
衣料、小遣い、雑用品がいるが、贈り物もあつて換
金されたから、旅費は残つたと思う。

同十九日

一 去ル十一日攝津守殿被仰渡候市野金助先達て請取
候雜用并御手当金銀御扶持方等請取過之分可致(返納)
旨攝津守殿被仰渡候間 其段心得可申旨、下役柴山伝
左衛門、中嶋長三郎江申渡置候處、今日より下役三人
連名ニテ申遣候由 然ル處請書左之通申越ス

柴山伝左衛門殿
中嶋長三郎殿

下河辺政五郎殿

一 八ツ時半頃 当番御目付中より左之御書付到来

*

当番
(封書) 高橋作左衛門 御目付中

*

別紙御書付壹通 摂津守殿被成御渡候二付、為御持被

下落手仕奉得其意候 以上

別紙御書付壹通 摂津守殿被成御渡候二付、為御持被
(封書) 当御番
御目付中 高橋作左衛門

右二付御目付江左之通返書申遣ス

下役の補充である。大番組という戦闘部隊からの出向命令である。

先生御申渡之趣昨日御達被下奉畏候
取過之分返納可仕旨 去十一日摂津守殿被仰渡之旨

誠以恐入候御儀ニ御座候得共 私儀當六月下旬より長々病氣ニテ藥料等其外旅中故存外多分雜用相掛 甚以困窮仕急ニ只今御皆済返納之義 奉恐入候得共此御儀兼々心得覺悟仕御皆済返納可仕と奉存候得共 急ニ出来兼当惑仕候

何卒先生御憐愍を以返納方御手続儀御勘弁御差加偏御憐愍奉願候
右之段奉願候趣各様より先生江宜被仰上被下候様奉願候 以上

八月十九日 関
当番
御目付中

八月十九日 関
当御番
御目付中様

八月十九日 高橋作左衛門

八月廿日 関
市野金助 印

目付は、老中・若年寄の通達文書の伝達もするらしい。テレビの世界とは大分違うようである。

一 今夕市野金助より左之願書差出ス

同廿三日
一 勘解由御用先京都より御用状到来 京都御代官小堀中務より達ス 今便左之願書差越ス

(表書) 西国測量二付増人奉願候

八月廿日 関
市野金助 印

右測量御用下役相勤候様申渡候 右御用相勤候内、御扶持方三人扶持被下候間可被得其意候 尤大御番頭可被談候 忽論下役之者西国筋測量御用相濟候ハ、差免之儀可被申聞候

*

下河辺が測量現場へ出るので、測量期間中の天文方

*

私儀測量御用先より病氣二付願之通り帰府仕難有仕合奉存候 右二付先達て雜用并御手当金銀御扶持方等請

志州より勢州度会郡八入海嶋々大難所ニ御座候上 別

て紀州一国悉入海出崎數多 海岸絶壁大岩石 異ニ波浪荒ク候ニ付乗船測量仕候義甚六ヶ敷 絶壁を伝ひ又

ハ巖石ニ取付 上下辛勞仕候て漸相測申候ニ付波浪ヲ
冠リ巖石より落候て怪我等も仕候

私儀は兼て覺悟之儀ニ御座候得共 御差添之人 内弟子共まで大難所之上 紀州ハ南江張出候國故 別て大暑ニ付病人不絶出来仕候て手分ニも差支難儀仕候

乍併潮時又ハ風波を見合相測候儀ニ付 中二も手輕病
人ハ押て手分測量も為仕候 潮時都合ニて日々暮迄も
出精相測候ても大難所之西國順礼街道より海岸ハ別て
大難所 里数ハ三倍ニも御座候間 大坂迄三ヶ月と見
込候處

此度大坂着六ヶ月余相掛り申候 大坂京都江州測量中
所々ニて承合 猶又相調候處中国は嶋々數多 北国海
辺ハ岩石難所ニて風波有之候てハ測量も相成兼候趣
四国九州ハ嶋々も入海も數多 蜂之巣 珊瑚樹之如
入込候様子ニ承知仕候

右江戸出立後大阪着迄三ヶ月見込相違仕候儀ハ恐入奉
存候 乍然土地不案内ニ御座候得は 西國順礼道之日
數相積り候事ニ付相違仕候 是迄之都合ニてハ国々測
量何ヶ年相掛可申も難斗奉存候 何卒一ヶ年も早ク御
用相済候様仕度奉存候

可相成御儀ニ御座候ハ、測量手伝今四五人御増被下候
様奉願候 左候へは少々病人出来仕候ても 測量手分
に差支茂無之 病人無之候節ハ方位推算地図之下書も
出来仕候 右之段御勘弁被成下 御增人被仰付候様奉
願候 以上

閏 八月

高橋作左衛門殿

伊能勘解由 印

* 指摘した紀伊半島の岩場の測量模様が生々しい。絶壁に取り付いて落ちたものがあるとか、病人にも作業させたとか、このあたりの記述はもつと世間に紹介すべきだと思う。

一 今夕秋山江罷越 右勘解由より差越候人増願書為
見置 尤是ハ勘弁之上可奉願 余り日數延引ニ罷成候
ニ付中国不残測量仕廻 一応帰府為致 地図等仕立猶
又可遣とも存候間 何レ勘弁之上可奉願と存候段申聞
置。

*

早速、奥祐筆の秋山を訪ね、書状を見せ、中国筋の測量を終わったら一旦帰らせたいとおもう。よく考えて申請したいと第一報を入れる。

このとき、景保は二〇歳だったが、よく動いて司令部機能を果たしている。気のきいた、優秀な若者で、関係者にも愛されていたのである。色々教えて貢っている。

市野金助の旅費返納についても願書を見せて、景保から申請すべきかを伺う。いま、いくら返せるのか、残りをいつまでに、どう払うのか調べてから願うべきだと教えられ、下役から金助に通知させる。

閏 八月廿五日

右二付左之通 返書差越ス

(表書) 吉田栄六郎様

下津董歲様

市野金助

以手紙致啓上候 然は御手前様此間御差出有之候 雜用并御手當金銀御扶持方等請取之分返納方之儀 只今皆済返納之儀相成兼候ニ付 致勘弁吳候様御願書之趣、作左衛門致承知候

右ニ付只今返納相成候分何程有之候哉 且唯今返納不相成候残金 何頃迄ニは皆済返納可相成哉 右之段早々致承知度旨 作左衛門申聞候ニ付 此段申遣候 以上

市野金助様

吉田栄六郎

下津董歲

同廿五日 *
金助方江左之通董歲 栄六郎兩名を以遣ス

○金助より差出候金子返納方願書 是又為見候て右願書之振合ニ此方より可願哉と承り合候處

何レ金助方ニ此度何ヶ程返納相成や承り將又残り之分何頃迄ニハ返納可相成哉 是又承り候て
或ハ此度何程返納仕 残リ何程ハ五ヶ年賦か十ヶ年賦
か 金助申次第 其年を以相願候方可然段 松之亟被申聞候ニ付 其趣可取斗筈也

乍恐唯今金拾八兩返納仕 残金之儀は追々返納仕度
恐入候御儀ニ御座候得共 私より何頃迄御皆済可仕
と申儀難申上 何レニ茂先生御憐愍を以被仰付候ハ、

其節追々返納仕度奉存候

呉々恐入候御儀御座候得共 右御手続之儀偏御憐愍之程奉願候 右御請申上度 其段先生江宣敷御仰上被下候様奉願候 以上

閏

八月廿五日

金助からは、とりあえず十八両は返納しますが、あとは追々返納したい、時期については申し上げ兼ねるとの返事がある。

勘定所へいって前例を問い合わせたところ、今春、長崎へ出張した徒目付、御小人目付の旅費返納の例があり、十力年年賦で返済することになっているので、今回もその様に願つてはといわれ、そうすることにする。なかなか、いい上司だ。

同廿六日

一 登城 御勘定所江罷越 右金助御手当等請取過之 分返納之義 外二例も有之哉之段承合候処 当春御徒目付 御小人目付等長崎江罷越候節 請取過之分ハ十ヶ年賦ニ被仰付候間 此度茂其例ニ御願可被成旨申聞候ニ付 右之趣可取斗積リ也

*

つぎは、下河辺への御証文下付願い。この証文によつて旅行に必要な馬を利用できることになる。交付日は出発前日、帰着したら直ぐ返却する。厳密に運用されたようである。

*

一 左之御證文願書 秋山松之亟出勤無之二付 御右筆仲沢達之助を以 摂津守殿江上ル

(表書) 私手附下役御證文之儀奉願候書付

高橋作左衛門

*

私手附下役下河辺政五郎儀 西国筋為測量御用罷越候

二付 来ル九月六日出立為仕申度奉存候間 御證文來

九月五日被下置候様奉願候 以上

丑

閏八月

高橋作左衛門

同廿七日

病氣は仮病なので、すぐ全快する。間がいくら経緯を聞いても云わなかつたと、間から平山郡藏あての書簡に出でくる。

一 市野金助義此間病氣二付大坂表より帰府致候節勘ヶ由より添触無之 一分之先触ニテ罷越候此儀先達て西国筋江罷越候節被下候御證文ハ勘解由、善助、

金助、貞兵衛四人分一紙ニテ被下候へは 此度金助

儀帰路御證文所持致候儀不相成候間 矢張御證文所持

之通馬一匹差出道中無差支様可致段 勘解由より添触

可遣旨此方より先達申遣候ニ付 勘解由より其段金助

が出ていた。(六六号参照)、忠敬も添え触れを出す

といつたが、金助は要らないといつて証文は無いのに、

自分の先触れで帰つたという。

改曆御用のとき自分先触れで帰つたというのだが、

そのときは御証文を持っていた。今回の御証文は忠敬

が持つており、証文無しに、測量御用の文言を用いた

自分触れで帰つたことを問題視する。

途中で御証文を見せろという者がいたらどうするのか。こちらから渡すというのを要らないといい、忠敬の命令を拒み、口も利かないという。(不届きなので)このことを申し聞かせ、退かせようとしたが、間五郎兵衛が強くどめた。

不本意だが、右も左も五郎兵衛次第なので、任せました。五郎兵衛から内々の書面で金助に、このことを伝えたところ、不調法の段恐れ入り候・・・と返書があり、忠敬にも伝えました。

筆者も金助の行動は理解しかねるが、本史料で景保がやめさせようと考えていてこと分かつて、すつきりした。五郎兵衛が反対したのは、専門職として使いたいとは思えない。

病氣は仮病なので、すぐ全快する。間がいくら経緯を聞いても云わなかつたと、間から平山郡藏あての書簡に出でくる。

長州藩毛利家の伊能測量記録(三)

渡伊鈴河
辺藤木島
一栄純悦
郎子子子

山口県文書館蔵毛利文庫蔵 伊能測量関連宰判記録より

一、まえがき

六五号で筆者らが紹介した毛利家文書のなかの宰判記録について触れてみたいと思う。この記録はひとことでいうと、伊能測量に地元でかかった費用を代官所(毛利領では代官所の管轄区域を宰判と呼んでいる)請求し藩に伺い処理された経過記録である。

伊能測量に關係がある宰判はもつと多い筈であるが伊能測量関係の記述が見つかたのは、六件のみであつた。中身が濃い三件をここで紹介する。

これら宰判文書は原文書を楷書に書き直されたものである。内容は測量に提供した人足の賃銭と米代の数字の羅列で、藩の勘定奉行に伺つて郡の経費で処理されたことを示している。登場しない宰判では通常のルールで支弁されたということであろうか。

二、山口県文書館毛利文庫両公伝資料三六〇

三田尻宰判本控九 より 関連記事抜粹

申上候事

一、銀二百二十一匁四分

但 小早船五艘之内、四艘 一艘五人乗船前共六人
べ人数二十四人、四月二三日より同二四日まで 日数二日分相縮人数四八人、同断残り一艘乗組之水夫六人、四月二三日より同二九日迄 日数七日分相縮人数

以下文言を省略して結果の数字のみを整理する。漕

ぎ船は手漕ぎの曳き船か。

一、銀二百二十一匁四分

小早船 五人十船前一人 \parallel 六人、二日×四艘 \parallel 四八人
水夫六人、七日×一艘 \parallel 四三人 (四月二三日一二九日)
御乗船・通船・小早船へ人足の提供

七人×二日 \parallel 四人

四月二三日、一日分 一九人、合計 一二三人

わかりずらいが、これらの人足と水主を、一日あたり飯米一升と銀二匁で雇つたところ、下された銀は二分だつたので、一人当たり銀一、八匁足りないと、内訳を付けて出した申請のようである。船前は船頭か。

一、同三貫八百三十四匁

但 御乗船四艘の内二艘へ船別漕ぎ船四人乗り五艘宛 四月二三日より同晦日まで日数八日詰、メ三百二十人 船別船前一人役メ八十人共に相縮四百人、同断船前御用達船四人乗り二艘、二人乗四艘並に御台所船え漕船二人乗り二艘宛 日数同断メ三百二十人、船前同断メ百二十八人共、相縮四百四十八人、同断船前御荷物船四人乗一艘、同断漕ぎ船四人乗り一艘、御台所船四人乗一艘宛、日数同断 メ百九十二人。船前大船に付船別一人役メ九十六人共相縮二百八十八人、御乗船メ二艘え船別漕船四人乗五艘宛 四月二十三日より二十九日まで日数七日詰メ二百八十八人、船前船別一人役メ七十人共相縮三百五十人、同断船別御用達四人乗二艘二人乗四艘並に御台所船え漕船二人乗二艘宛、日数同断メ二百八十人、船前同断メ百十二人共二相縮三百九十二人、同断船別御荷物船四人乗一艘、同断漕船四人乗一艘御台所船四人乗一艘宛、日数同断メ百六十八人、船前大船二付船別二人役メ八十四人共相縮二百五十二人共二総人数メ千百三十人分、断前に同じ。

賃飯米、一日一升、賃金を銀二匁として申請したが、銀○・二匁しか渡されなかつた。
不足分は、一・八匁メ一二三人 \parallel 二二二匁四分。
一日に米一升と銀二匁の日当は、結構な数字だつたのではないか。米一石は米五五匁という数字が後に出るから、二匁は三升余、他に飯米 升がついた。もつとも、飯米は共通経費で個人に渡らないかも知れないが。

一、銀三貫八百三十四匁

御乗船グループA 二艘

御乗船一艘あたり漕ぎ船、四人十船前一人 \parallel 五人、五人×五艘×八日 二百人

御乗船二艘につき、メ二 \parallel 四百人
御乗船一艘あたりの船前・御用達船

御用達船四人×二艘、漕ぎ船一人×四艘

御台所船江 漕ぎ船二人×二艘宛 日数八日分

御乗船二艘なので 三百二十人

右 船前一人あて 一六人×八日 計一二八人

御用達船合計四百四十八人

御乗船グループAの船前・御荷物船

荷物船四人×一艘、同漕ぎ船 四人×一艘 台所船四人×一艘 八日分九六人

同右漕船二人×二艘×三組×八日 九六人

船前役二人×六組×八日 \parallel 九六人
荷物台所船 合計二百八十八人

荷物船其外諸役船舸子飯米之外、前々行形を以 日別
銀壹匁八分宛立遣候處、日別銀式分宛被立下候故 引

残間欠銀一ツ書之通御座候間、御了簡以 前書之通文
化三年分郡配当米之内 被立下候様 御願申出候間、

此段宜被成御沙汰可被遣候 以上

山口県文書館毛利文庫蔵 兩公伝資料二九三
上関宰判本控三より 関連記事抜粋
* 申上候事

寅十二月

大庄屋

大谷六左衛門

末国又左衛門 殿

右之通被成御沙汰可被下候 以上

同日

末国又左衛門

右御沙汰可被下候 以上

同日

糸賀 外衛

松野文右衛門 殿

一銀 九貫六百五拾四匁四分
但船舸子四百四拾五人

御仕構御用意同人別

飯米七合五匁宛二して三石三斗三升七合五匁

同断五千五百八十九人所勤同人別

飯米壹升宛二して五拾五石八斗九升共

メ五拾九石式斗升七合五匁

新升ニメテ五拾七石壹斗壹升四合式勺七才

賃錢人別壹匁八分宛にして合メハ百六拾壹匁式分

申出之内

人別賃銀式分宛にして壹貫式百六匁八分

飯米五拾七石壹斗壹升四合式勺七才

公米銀立二被仰付分引残右之通

壹石四斗四升三合七才、錢三貫式百匁四分七厘

公米銀被立遣分引残間欠右之通

一米 六斗五升九匁式才

一八拾文錢 式貫三百八拾四匁

但諸村丁間野取繪図供侍其外諸御入目米拾四石

式斗四升七合八匁三才

錢三貫六百式拾八匁壹分壹厘之内

米拾三石五斗九升六合九匁壹才

錢壹貫式百四拾四匁壹分壹厘

公米銀被立遣分引残間欠右之通

但諸村御手當宿仕構御入目米四石式斗六升八合

式才

壹升四合を郡の配当米から支出するよう承認されまし

た。残りは残百五拾三石式斗壹升八匁四才です

よ。という書付。末国は代官、糸賀は郡奉行、松野は

勘定奉行ではないか?

*

以下に二点同じように経費申請の文書があるが、文面そのままを紹介にとどめる。注目個所に網掛けした。

但諸村嶋々道作り御入目米七石式斗式升八合六才
錢百拾四匁五分六厘之内

一米 七斗八合七匁七才
錢七拾五匁九分八厘
公米銀被立遣分引残間欠右之通

米七石式斗式升八合六才錢八拾九匁五分六厘
公米銀銀被立遣分引残間欠右之通

一米 壱斗壹升五合七匁式才

一八拾文錢 式百六拾五匁六分

但於上御席御宿仕構諸御入目米式石式斗四升
式合四才

錢八百五拾六匁七厘之内

公米銀銀被立遣分引残間欠右之通

錢五百九拾匁四分七厘

一米 壱斗壹升五合八分

但御滯留中御宿船御賄其外本以所御入目米壹石四

斗四升三合七才、錢三貫式百六拾匁式分七厘之内

壹石四斗四升三合七才、錢三貫式百匁四分七厘

公米銀被立遣分引残間欠右之通

一米 壱石式斗八升式合五匁四才

一八拾文錢 百七拾目八分

但測量方御巡見船手諸人夫賃飯米併ろうそく代其

外諸御入目米壹石八斗九升四斗四升三合七才、九

升六才、錢八百五拾四匁八分之内

米六斗七合五匁式才、錢六百八拾四匁

公米銀被立遣分引残間欠右之通

一同百七拾七

但御廻浦二付き他郡間各雇飛脚並びに墨筆代其外

御入目

米式斗五升九合八匁八才、九升六才、錢四百八

九匁九分四厘之内

米式斗五升九合八匁八才、錢四百拾式匁九分四厘

公米銀被立遣分引残間欠右之通

一同百七拾七

但清繪図書上げ再応調替仕出御入目

米壹斗三升壹匁八才、九升六才、錢七拾五匁九分

八厘之内

米七拾五匁九分八厘

公米銀被立遣分引残間欠右之通

一八拾文錢 六百八拾六匁七分

但測量御用二付き諸役人飯米、併御宿心遣人飯米、
測量方御役人御買物代不足共御入目

米八石三斗四升五合四匁九才、銀三拾目六分八厘、
錢四百式拾九匁四分式厘

米七石六斗八升六合七匁式才 銀三拾目六分八厘、
錢四百式拾九匁四分式厘

公米銀被立遣分引残間欠右之通
メ米 式石八斗八升八合壹匁三才
此利 式斗八升八合八匁壹才

但 壱割付 候 メ
銀 九貫六百五拾四匁四分

八拾文錢 四貫三百八拾四匁八分
銀二メ 三貫式百七拾八匁三分五厘五毛
但 地下和市 百七文替ニメ

メ銀 拾式貫九百三拾式匁七分五厘五毛
此利 式貫六拾九匁式分四厘
但 寅ノ五月より卯ノ八月まで十六ヶ月分

月別壹割付ニメ
右御宿仕構其外御引受一件諸御入目先達而申出候内
公米銀被立遣分引残間欠右之通

合米 三石壹斗七升六合九匁四才
合銀 拾五貫壹匁九分九厘五毛
米ニメ三百石三升九合九匁
但地下和市銀百目二付式石替候メ

米單ニメ
三百三石式斗壹升六合八匁四才

内
百三石式斗壹升六合八匁四才 但文化三寅年分御藏
入御預地諸給領郡配当を以被立遣候様奉願候事
残式百石 但當卯暮郡方御仕度米之内無利ニメ御貸
渡被仰付來辰之暮より已ノ暮迄式ヶ年返納被仰付右
且納米ニ當ル分辰已兩年百石宛郡配当を以被立遣候
様奉願候事

右去夏測量方為御用 伊能勘ヶ由様其外御廻浦於
年郡算用之節 此達を以引合ニ可被差出候 以上
上関御才判御止宿丁間御打廻り之節被召仕候御乗船
賄方台所船荷物船其外諸役船賃飯米御宿仕構賄仕出
諸職人内夫料理人賃飯米諸買物代等相縮先達而御下
渡之儀御願申上候内
公米銀被立遣分引残間欠米銀米、単ニメ前書之通
御座候間、被召仕候諸役船諸人夫等小身之者共及差
闇當分借替を以払渡仕候、近年は九州辺御下り之
御上使様、御上下之御大名様方御通船も繁々候て、
別而海辺付村々迷惑仕儀御座候間、
相持之道理を以前断之通御座候間、内立二相見候通、
文化三年分御藏入給領郡配当を以、被立下残り當卯
暮郡方御仕度之内 無利ニメ 御貸渡被仰付腰書之
趣を以 郡配当ニテ返納被仰付候様奉願候 前段申
上候様 諸村困窮一統之儀ニ付 壱ケ年ニテ石當り
余分相成貢立難相成御座候間、偏格別之御了簡を以
前断申出候通 被仰付被遣候様奉願候
左候○後年郡方御算用究御引用之御証拠物之被成
御沙汰可被遣候 以上

上関御才判御止宿丁間御打廻り之節被召仕候御乗船

賄方台所船荷物船其外諸役船賃飯米御宿仕構賄仕出

諸職人内夫料理人賃飯米諸買物代等相縮先達而御下
渡之儀御願申上候内

公米銀被立遣分引残間欠米銀米、単ニメ前書之通
御座候間、被召仕候諸役船諸人夫等小身之者共及差
闇當分借替を以払渡仕候、近年は九州辺御下り之
御上使様、御上下之御大名様方御通船も繁々候て、
別而海辺付村々迷惑仕儀御座候間、
相持之道理を以前断之通御座候間、内立二相見候通、
文化三年分御藏入給領郡配当を以、被立下残り當卯
暮郡方御仕度之内 無利ニメ 御貸渡被仰付腰書之
趣を以 郡配当ニテ返納被仰付候様奉願候 前段申
上候様 諸村困窮一統之儀ニ付 壱ケ年ニテ石當り
余分相成貢立難相成御座候間、偏格別之御了簡を以
前断申出候通 被仰付被遣候様奉願候
左候○後年郡方御算用究御引用之御証拠物之被成
御沙汰可被遣候 以上

山口県文書館毛利文庫蔵 叢公伝資料四四七
小郡宰判本控九より 括粧

*

卯九月十八日 河内山忠左衛門 殿 松尾 代聞

九月廿七日 喜助 小橋手代 印

松野文右衛門

河内山忠左衛門 殿 松尾 代聞

柏村四郎右衛門 殿

山口県文書館毛利文庫蔵 叢公伝資料四四七
小郡宰判本控九より 括粧

*

九月廿七日 喜助 小橋手代 印

松野文右衛門

一米百七拾壹石七斗六升八合式匁四才
此銀八貫七百拾九匁式分

但 地下和市銀百目二付壹石九斗七升替ニメ右之通
右測量御用トメ伊能勘ヶ由様其外當夏御廻浦之節小郡
御才判諸浦御仕構諸役船舸子船前共二賃銀飯米御兩人
所申出之外間欠銀前書之通御座候条郡配当を以 被立
遣候様此段宜被成御沙汰可被遣候 以上

一米百七拾壹石七斗六升八合式匁四才
此銀八貫七百拾九匁式分

但 地下和市銀百目二付壹石九斗七升替ニメ右之通
右測量御用トメ伊能勘ヶ由様其外當夏御廻浦之節小郡
御才判諸浦御仕構諸役船舸子船前共二賃銀飯米御兩人
所申出之外間欠銀前書之通御座候条郡配当を以 被立
遣候様此段宜被成御沙汰可被遣候 以上

一米百七拾壹石七斗六升八合式匁四才
此銀八貫七百拾九匁式分

但 地下和市銀百目二付壹石九斗七升替ニメ右之通
右測量御用トメ伊能勘ヶ由様其外當夏御廻浦之節小郡
御才判諸浦御仕構諸役船舸子船前共二賃銀飯米御兩人
所申出之外間欠銀前書之通御座候条郡配当を以 被立
遣候様此段宜被成御沙汰可被遣候 以上

一米百七拾壹石七斗六升八合式匁四才
此銀八貫七百拾九匁式分

但 地下和市銀百目二付壹石九斗七升替ニメ右之通
右測量御用トメ伊能勘ヶ由様其外當夏御廻浦之節小郡
御才判諸浦御仕構諸役船舸子船前共二賃銀飯米御兩人
所申出之外間欠銀前書之通御座候条郡配当を以 被立
遣候様此段宜被成御沙汰可被遣候 以上

一米百七拾壹石七斗六升八合式匁四才
此銀八貫七百拾九匁式分

但 地下和市銀百目二付壹石九斗七升替ニメ右之通
右測量御用トメ伊能勘ヶ由様其外當夏御廻浦之節小郡
御才判諸浦御仕構諸役船舸子船前共二賃銀飯米御兩人
所申出之外間欠銀前書之通御座候条郡配当を以 被立
遣候様此段宜被成御沙汰可被遣候 以上

一米百七拾壹石七斗六升八合式匁四才
此銀八貫七百拾九匁式分

但 地下和市銀百目二付壹石九斗七升替ニメ右之通
右測量御用トメ伊能勘ヶ由様其外當夏御廻浦之節小郡
御才判諸浦御仕構諸役船舸子船前共二賃銀飯米御兩人
所申出之外間欠銀前書之通御座候条郡配当を以 被立
遣候様此段宜被成御沙汰可被遣候 以上

一米百七拾壹石七斗六升八合式匁四才
此銀八貫七百拾九匁式分

但 地下和市銀百目二付壹石九斗七升替ニメ右之通
右測量御用トメ伊能勘ヶ由様其外當夏御廻浦之節小郡
御才判諸浦御仕構諸役船舸子船前共二賃銀飯米御兩人
所申出之外間欠銀前書之通御座候条郡配当を以 被立
遣候様此段宜被成御沙汰可被遣候 以上

一米百七拾壹石七斗六升八合式匁四才
此銀八貫七百拾九匁式分

但 地下和市銀百目二付壹石九斗七升替ニメ右之通
右測量御用トメ伊能勘ヶ由様其外當夏御廻浦之節小郡
御才判諸浦御仕構諸役船舸子船前共二賃銀飯米御兩人
所申出之外間欠銀前書之通御座候条郡配当を以 被立
遣候様此段宜被成御沙汰可被遣候 以上

(小郡宰判本控)

伊能図はどう利用されたか

—その2 明治時代（1）—

鈴木 純子

はじめに

本誌65号所載の「伊能図はどう利用されたか」—その1「江戸時代」につづき、明治以降の伊能図の利用について報告する。

前回の江戸時代の利用についての報告では、よくいわれる「伊能図は幕府が秘図としてほとんど実用はされなかつた」という状況は必ずしも正確ではなく、特に開国に向かう幕末期においては欧米諸国との当面の接触ラインとなつた海岸線を「実測」した地図という認識のもと、よく知られた『官板実測日本地図』の出版ばかりではなく、海防用の地図作成の基図や、軍艦掛、外国掛の備付地図として活用されたこと、また、やや特殊な例ではあるが、天保国絵図の作成資料として利用された佐渡の例などを紹介した。

明治初期に地誌編さんや地図作成の基礎資料として広く利用された「伊能図」については、これまでのいくつかの報告（1）によつて明らかにされている。今さらの感もあるうかと思うが、その後詳細が知られるようになつたアメリカ議会図書館や海洋情報部所蔵の模写図群、またそれらの模写図作成のための原図の動きの記録、筆者が近時接する機会を得ている明治初期の内務省地理局旧蔵地図（未公開）からうかがえる伊能図利用の痕跡などの事例を加えて、利用の細部をたどつてみたい。

—明治を迎えた伊能図—正本と副本

明治とともに伊能図活用のピークがやってくる。その原拠となつた伊能図の正本および副本の明治初期の動きを先ずまとめておこう。

① 正本の焼失

幕府に上呈された正本が幕末期まで紅葉山文庫に収蔵されていたことは、国立公文書館所蔵の『元治増補御書籍目録』の記載から確認できる（2）。元治元年は一八六四年、翌年四月に慶應と改元されている。その後については、皇居内にあつた太政官正院に保管されていたところ、明治六年五月の皇居火災による太政官の類焼で全て焼失した。焼失書目（3）（図1～3）中には「實測輿地圖 三箱三十卷／實測輿地圖 中圖 二卷／小圖 一卷」とある。江戸府内図はこの中に入っていないが、この文書に関して福井（4）は別に「江戸繪圖 二冊」とあるのがそれであろうと推定している。太政官は明治五年九月に「皇國地誌編集一切正院二

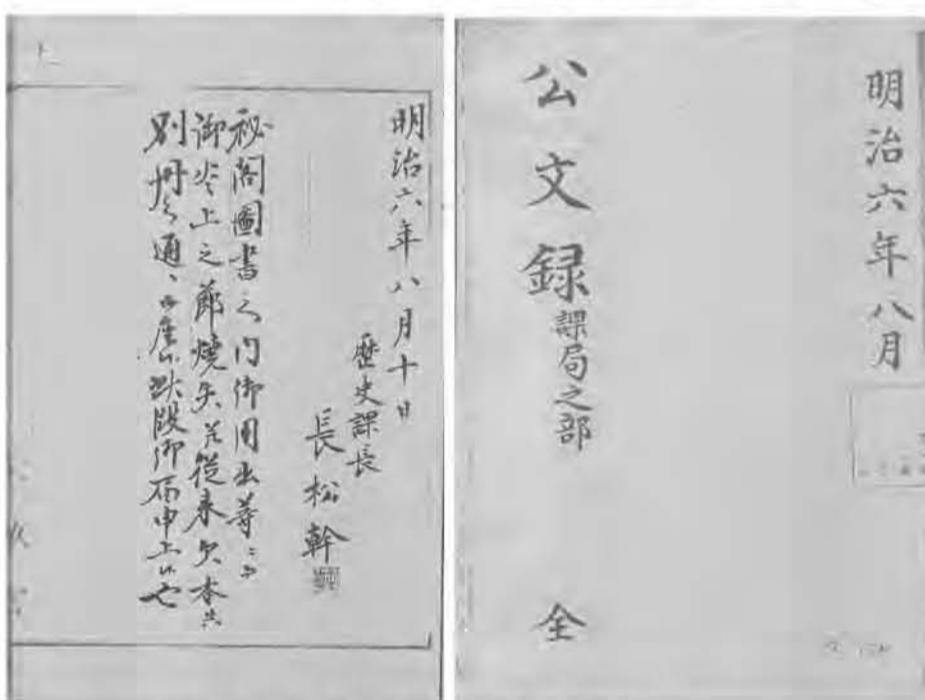


図1 明治6年5月皇城火災による焼失図書届
(「公文錄」明治6年8月「国立公文書館所蔵」)

管轄」（太政官達第二八八号）とされ、「関渉ノ書籍並地図類」をあまねく採集するため、諸省府県にも書目の提出をもとめている。紅葉山文庫にあつた伊能図もこの路線で正院に移されたと思われ、まずは明治六年五月開会の第五回万国博覧会（ウイーン）に出品された「日本全図」作成の資料として用いられた。この間の事情については河田龍が次のように述べている（5）。河田龍（一八四二～一九二〇）は、明治初期の地誌家で、明治政府の地誌編纂事業に終始かかわった人物である（6）。

「：会々澳太利國維因府博覽會ノ舉アリ、政府ヨリ地図ヲ陳列スルニ決シ、課ニ命ジテ急ニ之ヲ編製セシム、當時課務草創、製図手ナシ、陸軍省ヨリ人ヲ傭ヒ、人物である（6）。

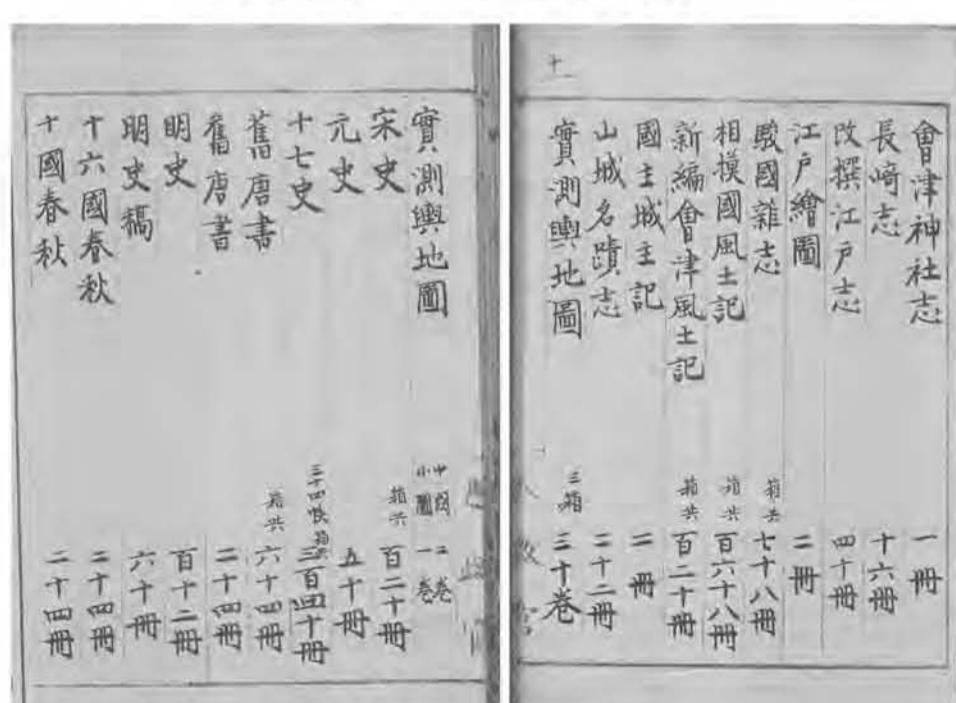


図2 上記届のうち焼失書目
(袋綴じの折目部分、右図中央部に「江戸繪圖」2冊とある)

専伊能忠敬実測小図ニ拠リ、腹地諸部ハ各地図ヲ参照シ、以テ之ヲ造ル、又国郡ノ大略ヲ記シテ、地図ニ副ヘシム、是ニ於テ紅葉山御庫蔵スル所ノ地誌地図ヲ借用ス」、「六年三月地図略誌共ニ成リ、製図師岩崎(マ)教章之ヲ携テ維因府ニ至ル、後澳國ヨリ賞牌ヲ贈ル」。

博覧会出品の「日本全図」の第一の原拠が「伊能忠敬実測小図」だったことはこの記述や、この博覧会の日本派遣団の副総裁であつた佐野常民（総裁は大隈重信）による、明治一五年の地学協会における講演「故伊能忠敬翁事蹟」から明らかである。

したがつてこの「日本全図」は、紅葉山本（正本）をもとに編集された唯一の地図ということになる。伊能図の直系である「官板実測日本地図」およびその後裔としての「大日本地図」（川上寛編）も原拠は紅葉山本ではなさそうである。

完成した編集図がウイーンで展示され、称賛され賞牌も得たという背後で、もとになつた貴重な地図が焼失する（博覧会も同じ五月に開会した）という事態はまことに痛ましい。さらに、残念なことにこの日本図は現代に伝わっておらず、またその様子を示す記録もみつかっていない。

博覧会に関する公式報告などにも、前回紹介したパリ万博の場合と同様、日本地図についての言及はない。まことに幻のような地図である。保柳睦美(1)は、宮本三平による「日本全図」（明治一〇年 文部省刊一：432,000 二枚一組）が、その姿をとどめる図ではないかとしている。この図は縮尺も小図そのまま、東西二枚で一組、多色刷の華麗な図で、そうした推定にも説得力は感じられるが、実証できる史料は見つかっていない。

なお、河田の記事中、製図師として招かれたとされる岩橋教章は江戸で狩野洞庭に絵をまなび、文久元年（一八六一）に幕府軍艦操練所絵図認方出仕、同所の伊勢志摩尾張沿岸測量に参加するなど、早くから日本

における地図製図の第一人者であった。ウイーンの博覧会に出張後、さらに官命をうけて同地に留まり、図学・銅・石版印刷術などを習得して日本の近代地図学の発足に貢献した。佐野ら政府の公式派遣団は二月に出発したが、地図は遅れて三月に完成した。河田の記事の後段にあるように三月末に遅れて出発した岩橋が持参した。この月、岩橋は「旧冬以来皇國製圖格別骨折勉励候ニ付」（8）として賞金を得ている。

ところで、紅葉山文庫から正院への貸出、皇居火災による焼失という上呈伊能図の運命は、前述のとおり焼失書目中にも記載されていて確かなことと見られるが、維新期の伊能大図について、ひとつ未解明の情報がある。国立公文書館所蔵の「諸届類・地理掛・明治二年」と題する簿冊中の「伊能勘ヶ由実測日本地図取調ノ件上申」という文書である（図3）。

この大図はいざれに由来するものだろうか。上呈図（正本）が一度は静岡に運ばれたのか、別のセットがあつたのか、どちらであろうか。残念ながらこの文書には別紙目録はついておらず、不明の号数、数量はわからないが、正本であるならこの明治三年の時点ですでに欠図ができていたのだろうか。不明だつたこの図がどこかに隠れていることはないものだろうか。

上呈図は前記の焼失書目では、実態はともかく完本として記載されている。あとでふれるが、工部省借用の副本がウイーン行きの日本図作成のため正院に復貸しされたという別の記述もある。欠図があつたためにそれを埋めるための貸出だつたのだろうか。問い合わせのみで結論に到達できないが、解明すべき課題としてあげておきたい。

② 副本・借用から献納へ

一方、伊能家に伝えられてきた大・中・小図、輿地実測録（便覧とも）と江戸府内図の副本は、正本がまだ健在だった明治五年一一月に、工部省測量司が一括して伊能家から借用した。「伊能忠敬関係資料」（伊能忠敬記念館蔵）中に借用書など関連文書が残る（図4）（9）。正本がまだ太政官に保管されていた明治五年に、別途副本を借り出してまで利用をはかつたということは、近代的な体制の整備を急ぐ新政府にとって、地誌・地図の基礎となる実測「伊能図」が大きなよりどころであったことを示すといえる。当初借用とされていた伊能図は、明治七年八月に伊能家から政府に献納された。河田熊（10）はこの火災についても、

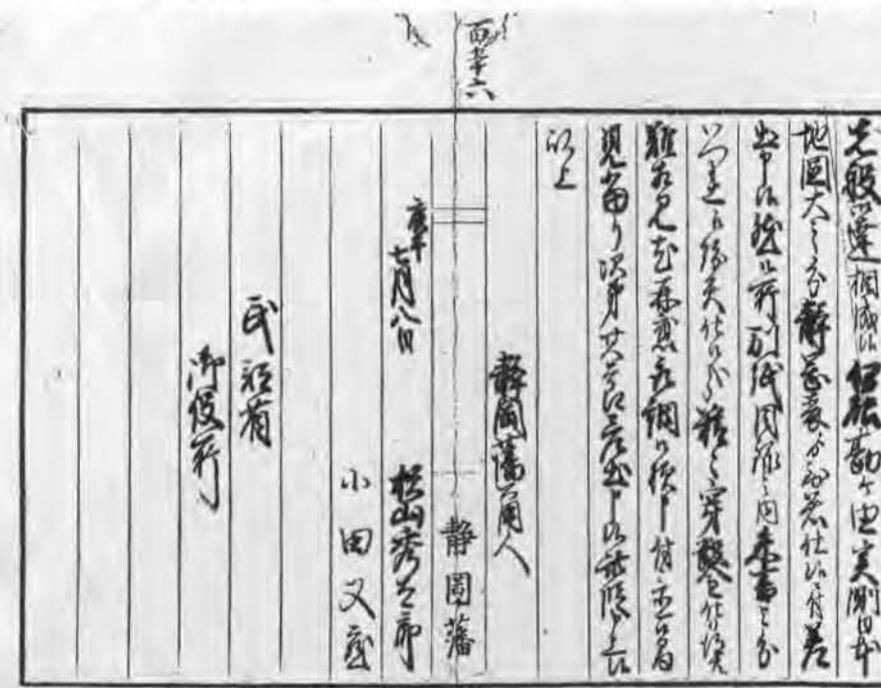


図3 「伊能勘ヶ由実測日本地図取調ノ件上申」
（「諸届類・地理掛・明治2年」〈国立公文書館所蔵〉）

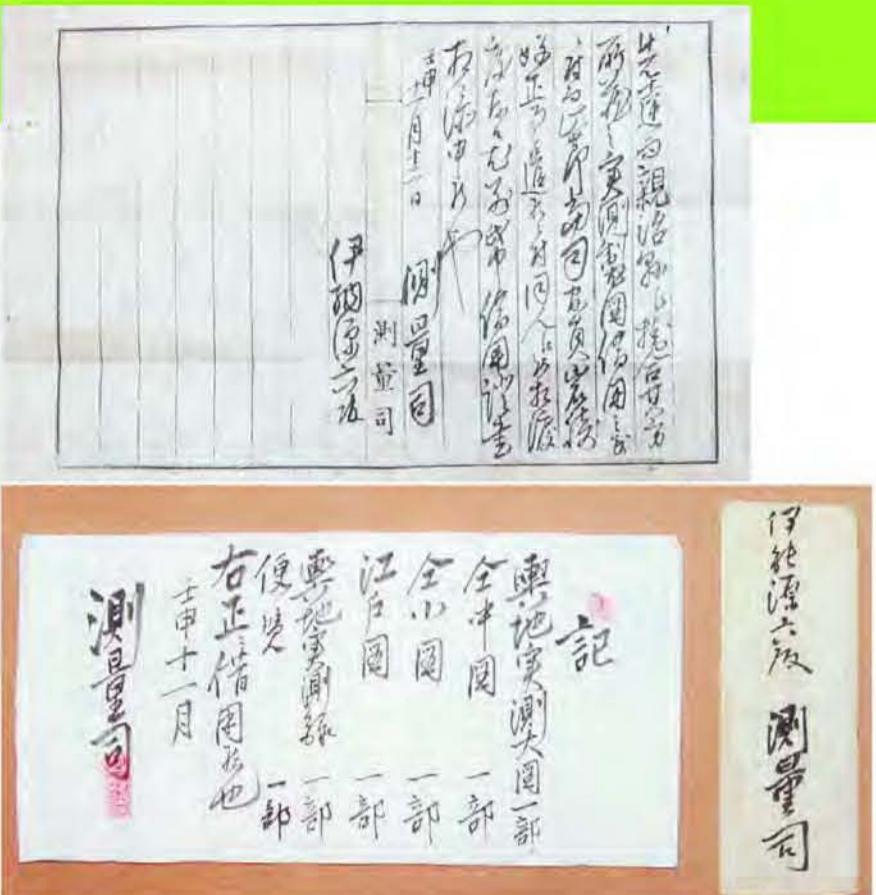


図4(右上)測量司より人員派遣通知
 図5(右下)地図借用書
 図6(左)御国実測図献納につき賞金
 (3図とも伊能忠敬記念館所蔵(国宝版)(河出書房新社)による

図6(左) 御国実測圖献納につき賞金
(3図とも伊能忠敬記念館所蔵(国宝)、『伊能忠敬の地図をよむ 増補改訂版』(河出書房新社)による)

関係機関の変遷(概要)

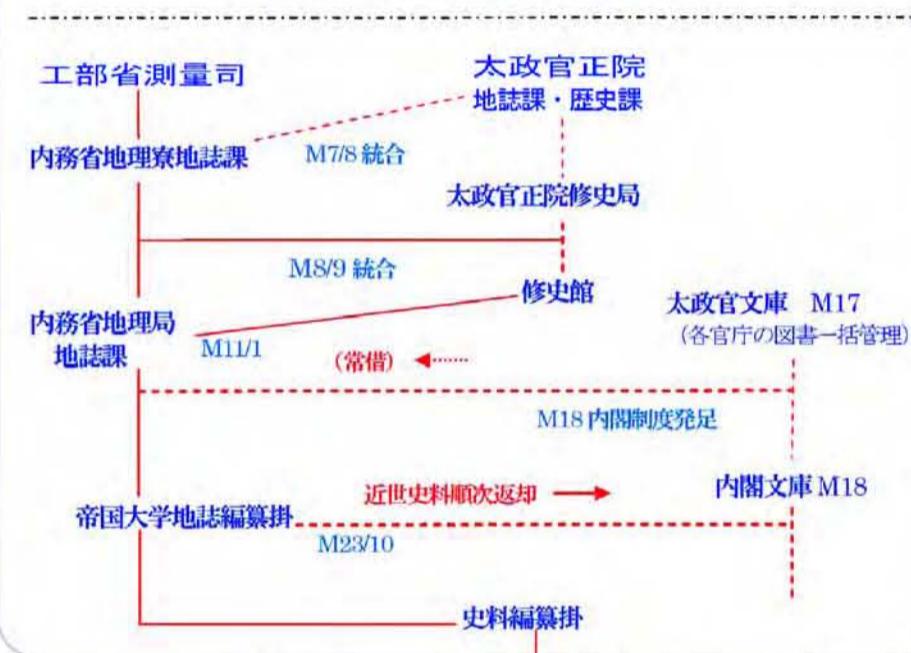


図7 収蔵機関の変遷（測量司から地理局への道筋はやや単純化してある）

引き続き地理局にとどまつたという。前記のとおり、そのまま地誌（史料）編纂掛に引き継がれた。その後、これらの「常借」資料のうち維新前のものは順次本来の内閣文庫に返却されて行くが、目録上のメモによれば、伊能図は明治四一年（一九〇八）十月に内閣文庫ではなく大学図書館（東京帝国大学）に移されている（図8）（13）。

帝国学士院が総会の決議にもとづいて、大谷亮吉に伊能忠敬研究の実施を委嘱したのが明治四一年であるという点から見て、その便宜を期しての特別な措置

とし、割注の形で、幕府撰「新編江戸府内風土記稿」二箱凡百余冊など特記すべき数点の資料とともに、「紅葉山御庫旧蔵ノ、伊能忠敬実測大中小図も亦皆燐々、尤モ惜シムベキモノナリ」また、「文書大半災ニ罹ルヲ以テ、諸省府県ニ令シテ謄写上呈セシメ、地誌書図モ同ク令シテ搜索シテ之ヲ上ラシム、伊能実測図ノ如キ必要闕クベカラザル者ナルニ、幸ニ千葉県佐原町忠敬子孫ノ家ニ、大中小図尽ク副本ヲ蔵スルヲ聞キ、諭シテ之ヲ献ゼシム」と記しており、すでに借用していたものについて「蔵スルヲ聞キ」という表現はややそぐわないが、献納してほしいという交渉の動機が正本の焼失にあつたのは

③ 献納された副本の所在

正本が工部省による副本借用から半年弱で焼失してしまったため、明治期の伊能図利用のほとんど全てはこの副本によることになったわけである。

事実であろう。伊能家には賞金三百円が贈られて いる（図6）。

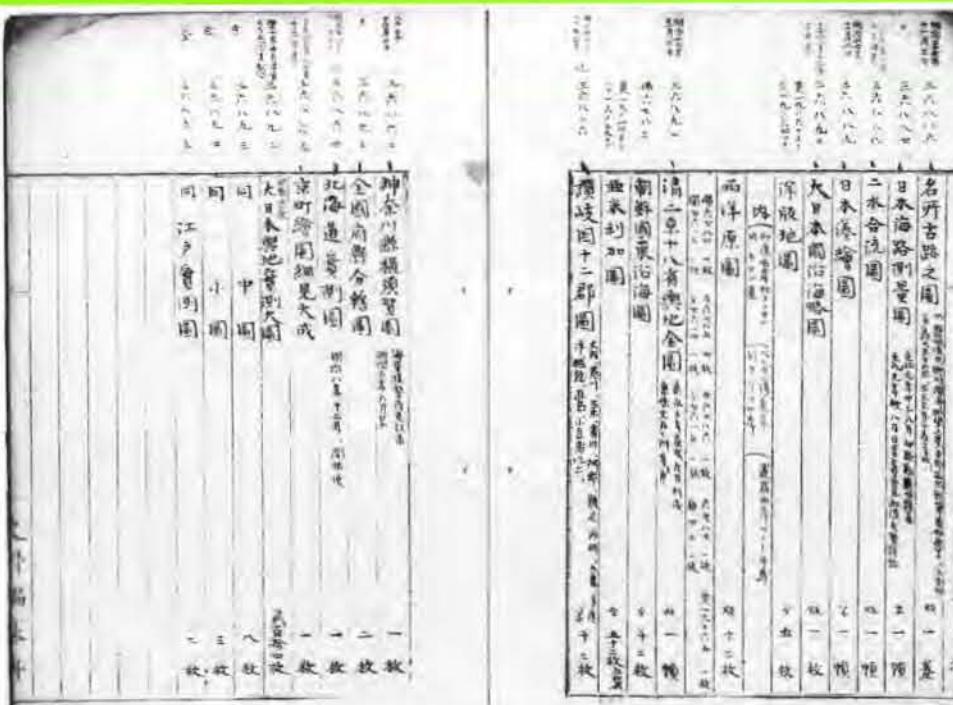


図8 大学図書館への地図移管を記録する「内閣記号地図目録」
(東京大学史料編纂所所蔵 『伊能忠敬の地図をよむ』より)

明治から大正にかけて約五〇年にわたり、公共の財産として確かに保持された副本であるが、おそらく活発に利用されたのは陸地測量部などによる近代測量の進展以前の明治一〇年代半ばごろまでであろう。政府内に保管されたこの図を直接利用できたのは当然ながら陸・海軍を含む政府諸機関に限られ、民間への影響は官製図を介しての間接的なものであった。

二 各機関の伊能図と模写

『水路部沿革史』『陸地測量部沿革史』にはそれぞれ伊能図の利用状況が記載されている。内務省から陸地測量部まで一貫して三角測量に従事した人物であるが、回顧録であるため、伊能家に地図の借用に出向いた担当者の名の取り違えもみられ（館は三浦省吾とするが「伊能忠敬関係資料」中に残る派遣通知の文書では岩崎好正）、記載事項の信頼性には限界がある。正院への貸出は前記の静岡藩の欠本情報とかかわるかどうかが問題として残る。いずれにせよ、借用した図は返却することが前提であり、模写が行われたことは確かだろう。

しかし、模写が行われたとして、その模写図の行方はわかつていい。大図の一部は国立国会図書館所蔵図である可能性があるが、それを裏付ける史料は見つかっていない。文書に残る各機関との貸出しの折衝は模写図の貸借ではなく、副本そのものを対象にしたものであるようと思われる。模写図は地図作成作業用に利用され、消耗してしまったのだろうか。

② 献納後の模写活動

副本が献納されたのちの明治九年（一八七六）、内

大谷の『伊能忠敬』は大正六年（一九一七）に完成、そのわずか六年後に、関東大震災による同図書館の全焼で、貴重な副本もまた失われてしまつたわけである。結果論ながら、大学ではなく内閣文庫に返却されたなら、今も揃つて健在であつたのだろうと残念な気がする。

明治から大正にかけて約五〇年にわたり、公共の財産として確かに保持された副本であるが、おそらく活発に利用されたのは陸地測量部などによる近代測量の進展以前の明治一〇年代半ばごろまでであろう。政府内に保管されたこの図を直接利用できたのは当然ながら陸・海軍を含む政府諸機関に限られ、民間への影響は官製図を介しての間接的なものであった。

二 各機関の伊能図と模写

『水路部沿革史』『陸地測量部沿革史』にはそれぞ

れ伊能図模写の記録が残る。また、所管機関であつた修史局、地理局などの文書中には、伊能図の貸出についての往復文書が残っている。それらのいくつかも紹介しながら明治前半におこなわれた伊能図副本模写の動きをさぐる。

① 工部省借用図の模写

館潔彦稿「三拾三年乃夢 日本測量野史稿」によれば、伊能図を借用した工部省では、相応の描き手がいなかつたため、外部から「絵画者」を雇い入れて模写にあたり（一四）、また、万国博覧会出品の地図作成にあたっていた正院に復貸ししたとも記す。

あつたはずだが、さらにまた貸しをするということもあつたのだろうか、一考を要するところである。

この記事の筆者、館潔彦は陸地測量師で、工部省、内務省から陸地測量部まで一貫して三角測量に従事した人物であるが、回顧録であるため、伊能家に地図の借用に出向いた担当者の名の取り違えもみられ（館は三浦省吾とするが「伊能忠敬関係資料」中に残る派遣通知の文書では岩崎好正）、記載事項の信頼性には限界がある。正院への貸出は前記の静岡藩の欠本情報とかかわるかどうかが問題として残る。いずれにせよ、借用した図は返却することが前提であり、模写が行われたことは確かだろう。

しかし、模写が行われたとして、その模写図の行方はわかつていい。大図の一部は国立国会図書館所蔵図である可能性があるが、それを裏付ける史料は見つかっていない。文書に残る各機関との貸出しの折衝は模写図の貸借ではなく、副本そのものを対象にしたものであるようと思われる。模写図は地図作成作業用に利用され、消耗してしまったのだろうか。

地理寮量地課と同じ時期、二月廿二日付で、陸軍參謀局も陸軍大佐小澤武雄の名で、正院にたいして、「伊能忠敬ナル者製スル處之實測日本輿地図」の模写のための貸渡しを依頼し、借りられるなら武藏國近傍から順次借りたい（一六）とした。正院は一等修撰塚本明毅から、地理寮からも同じく借用を依頼されたが、地理寮は厚く保護するため、こちらに来て写している、同様の手続きで謄写すること、大図は御省に備え置かれていると思うが、大中小いずれの謄写が必要か、主任のものを一人出頭させ面談をするようという回答がなされている。修史局に赴いて大図の模写をおこなつ

れ伊能図模写の記録が残る。また、所管機関であつた修史局、地理局などの文書中には、伊能図の貸出についての往復文書が残っている。それらのいくつかも紹介しながら明治前半におこなわれた伊能図副本模写の動きをさぐる。

修史局、地理局などの文書中には、伊能図の貸出についての往復文書が残る（一五）。それによれば、地理寮の図に欠図があり、その補充のため模写をおこないたいとして、量地課が伊能図の貸出を申請したのにたいし、正院は貸出はできないので、模写が必要であれば当所に写手を出向かせて、写すようにとの回答をした模様で（この部分については文書未見）、それに応じて二月一八日から補写のため二名出向かせるので、作業場所を準備してほしいという量地課の依頼書と、承知した準備するという正院にあたり（一四）、また、万国博覧会出品の地図作成にあたっていた正院に復貸ししたとも記す。

あつたはずだが、さらにまた貸しをするということもあつたのだろうか、一考を要するところである。

この記事の筆者、館潔彦は陸地測量師で、工部省、内務省から陸地測量部まで一貫して三角測量に従事した人物であるが、回顧録であるため、伊能家に地図の借用に出向いた担当者の名の取り違えもみられ（館は三浦省吾とするが「伊能忠敬関係資料」中に残る派遣通知の文書では岩崎好正）、記載事項の信頼性には限界がある。正院への貸出は前記の静岡藩の欠本情報とかかわるかどうかが問題として残る。いずれにせよ、借用した図は返却することが前提であり、模写が行われたことは確かだろう。

しかし、模写が行われたとして、その模写図の行方はわかつていい。大図の一部は国立国会図書館所蔵図である可能性があるが、それを裏付ける史料は見つかっていない。文書に残る各機関との貸出しの折衝は模写図の貸借ではなく、副本そのものを対象にしたものであるようと思われる。模写図は地図作成作業用に利用され、消耗してしまったのだろうか。

たかどうかは確認できない。

修史局では大図は陸軍省にあるのではないかといつており、陸軍が早い時期に大図の模写を行っていたのかどうかも知りたいところである。

陸軍参謀本部（参謀局の後身）測量課は明治一二年（一八七六）に全国一〇万分一地図の作成計画の立案にあたってその基本を「伊能大図に倣い」としている（次号）。

修史局のいうとおり明治九年以前から大図写本を

もつていたのか、明治九年の時点で修史局にでかけて写したのか、経過はわからないが、いずれにせよ明治一〇年前後には陸軍も大図模写図を保有していたと思われる。これがアメリカ大図である可能性もある。

陸軍省参謀局と修史局の間には、続く三月から四月にかけて中図の貸出と、地理寮同様、途中で一時返却、再借り出しのようなやりとりがある。参謀局の模写は『陸地測量部沿革史』明治九年の項に第五課の実績として「…且「伊能図」の模写に著手し…」とあること

に符合する。

大図の模写を直接示唆する記録はみつかっていない。

国土地理院には中図の模写図六図（北海道を除く本州・四国・九州部分、針穴あり）が現存している。

海軍水路局も伊能図の模写をおこなった。

『水路部沿革史』にも「明治十年 本年の総況」の項に、「…或いハ図誌ノ資料トシテ伊能忠敬実測大尺度ノ日本分図数多ヲ写了スルト全時ニ…」

また、明治十一年「伊能氏測図写成」として、「先年ヨリ内務省地理局ヨリ漸次借用セル伊能忠敬日本分図三百余葉ハ本月ニ至り殆ト全部ヲ写了セリ」

とある。大尺度の図、即ち大図とすれば、中図・小図を加えたとしても多いが、多数と云う意味での表現かもしれない。大図も借り出して写したことがうかがわれるが、明治九年の段階から数年で、貸出についての条件が緩和されていることになる。

残念ながら、この模写図は関東大震災による原備倉庫の火災で全て焼失してしまつ

た。しかし、別に同局の第二課（のち測量課）が、業務参考用にこれらの模写図から謄写して保有していた図があつた（17）。これが現在海洋情報部につたわる一四七枚の模写図である。

模写の由来は地図とともに保管されている「伊能忠敬實測圖寫圖目録」の前書き「水路部保管伊能氏日本實測圖謄寫圖ニ就テ」に記されている。邦文タイプで印字されたこの目録は用字などからみて戦前期のものと思われる。

一四七枚のうち、原寸大の模写図は六枚（図9）、縮写図が一四一枚となつていて、原寸大の図はもちろん、縮写図にも精緻なものが少なくない。

また、これらの模写図のうちの大図第一二（12）、一三三（67）、一五七（76）、一六四（73）へ（）内の数字は海洋情報部の資料番号の各号は縮写図で、描画形式も変更されているが、全二一四枚の大図のうち、各機関の所蔵図を合わせても最後まで埋まらなかつた四ピースにあたる。大図のこの部分についての現存唯一の模写図である。確認後大きく報道されたことをご記憶の方も多いことと思う。

大図のうち百七十七枚（北海道の部分を除くとこの枚数になる）については、明治十五年にも模写がおこなわれている。内務省文書中に記録が残る（18）。

明治一五年の部分に、「模写伊能實測大図」として、「伊能忠敬實測の大図百七十七枚（原本本課藏）」（19）を、この年三月から七月にかけて複写したことが記録されている。

写手は「本課」に出頭して就業したという。寫料四九五円五六錢、紙料八八円五四錢、総計五八四円一〇錢、第一回として三月二〇日に一二枚分、以後は各一枚分ずつを、間隔をおいて七月二六日の第一二回まで分割して支払い、「購求」として処理をしている。約一〇年前の明治七年に大中小図、江戸府内図、輿地実測録・便覧の献納への報奨として伊能家に支払わ



図9 大図第181号 大分・別府（部分）（海上保安庁海洋情報部所蔵）

れた三〇〇円は妥当だったのだろうか。庶務課（地理寮）からの照会に対し、「凡三百圓」が相当としたのは地誌課である（²⁰）。

時間と費用をかけて優れた模写図ができていたと思われるが、残念ながら、この図も副本と同様、大学図書館に移管されたことが記録されており、震災でともに焼失してしまったと思われる。

明治期の伊能図利用について、正本と副本の動向、政府に献納された副本の各機関による模写活動についてひとまとめたが、スペースの関係もあり、明治期模写図の現存状況、各機関の業務における伊能図利用の痕跡、伊能図をもとに編まれた地図の実例などについては次回に続けたい。

【注】

- (1) 保柳睦美「明治以後の日本の社会と伊能図の存在」（『伊能忠敬の科学的業績』）古今書院、1974 235-267・清水靖夫「伊能図―『大日本沿海輿地全図』―の後裔」（『伊能図に学ぶ』東京地学協会編、朝倉書店、1998、108-117 など）
- (2) 鈴木純子「『大日本沿海実測録』正本の現存（『伊能忠敬の地図を読む 改訂増補版』）（河出書房新社、2010）
- (3) 「秘閣図書之内炎上之節焼失並從来欠本ノ届」（『公文録』・明治六年・第八卷）
- (4) 福井保『江戸幕府編纂物』（雄松堂出版、1983）
- (5) 河田熊「大日本地名辞書ノ前ニ書ス」（吉田東伍『大日本地名辞書』1900-1907）
- (6) 島津俊之「河田熊の地理思想と実践—近世と近代のはざまで—」（『人文地理』 56 (4) 、2004）

(7) 保柳睦美 前掲 (1)

(8) 塚原晃「近代美術と地図－川上冬崖と岩橋教章」（『神戸市立博物館研究紀要』17、2001）所載の教章年譜による

(9) 前掲 (2)

(10) 前掲 (5)

(11) 千葉真由美「皇国地誌編纂過程における地図目録と地図主管の移動—東京大学史料編纂所所蔵「内務省引継地図」と関連地図目録の検討から」（『東京大学史料編纂所紀要』14、2004、99-133）

(12) 内閣文庫の資料は現在、国立公文書館に引き継がれている。

(13) 「内閣記号地図目録」（「内務省文書」東京大学史料編纂所所蔵）中の「輿地実測大図」「同中図」「同小図」「江戸府内図」の上部に「明治四十一年十月／大学図書館」と記入されている

(14) 館潔彦稿「三拾三年乃夢 日本測量野史稿」（師橋辰夫「三拾三年乃夢 日本測量野史稿—東京実測全図余聞—」（『地図』 9 (1) 、1971 35-39所収）

(15) 「内務省往復」（修史局地誌掛、M9・15 M9・12、「内務省文書」東京大学史料編纂所所蔵）

(16) 「院省往復」（M9・15 M9・12、「内務省文書」東京大学史料編纂所所蔵）

三井住友銀行（銀行コード 0009）
東京中央支店（店番号 015）
普通預金 0978210
名義人 戸村 茂昭
または
郵便振替払込口座
記号番号 0028019182704
加入者名 イノベデイア

注 戸村茂昭さんは、イノベデイア（忠敬と伊能図のホームページ）の編集幹事で事務局を担当しています。イノベデイアでは、営業出版のルートには乗りがたい伊能忠敬関連史料のデータ化とDVD出版に務めています。現在、測量日記原文のDVDを頒布中です。

お知らせ

会報DVDの発行

十数年前に、名誉代表の渡辺が始めた個人的リポート「伊能図探求」第1号から第6号までと、フランス伊能図の佐原招聘、伊能忠敬研究会発足とともになって、研究会会報に改組された「伊能忠敬研究」第七号から、モノクロ版最終号の第六一号までをPDFファイル化しました。（ウインドウズに限る）

五五冊分をDVD一枚に収納し、記事目録も添付しました。パソコンをおやりになる方には便利だと思います。会員で、イノベデイア同人でもある竹村様の編集です。

発行は、イノベデイア。年内に頒布を始めます。申込先は下記のとおりです。ご希望の方はお申込みください。価格は一般一万円、会員七千円です。印税は研究会に納めます。

(20) 「伊能測量圖二代価下賜伺」（「内務省文書」東京大学史料編纂所所蔵）

伊能測量にかかつた費用の試算

渡辺 一郎

一、はじめに

B.S.歴史館の番組制作に付き合つていて、伊能測量は今のお金でどのくらいかかったのか、調べてほしいといわれた。大変苦労して試算をおこない、番組でもしゃべっているのだが、すっぽり落されてしまった。

N.H.K.のディレクターと直接やつていれば、こんなことは無いのだが、外注制作だと最後の段階で、放送局の責任者の鶴の一聲でカットされることがあるらしい。始めての経験だった。

また、私が何で伊能忠敬に関心を持つたか、その理由について冒頭で長いこと話をさせられたが、これもすっぽり落ちていた。こちらの方は、そんな話は無理だと思っているから気にならないが、伊能測量の費用試算の方は調べた結果を記録に残しておきたいと思う。

二、幕府が支払った費用

伊能測量の費用のうち、幕府が支払った旅費・手当については、大谷亮吉が「伊能忠敬」(585頁)のなかで、史料にもとづき詳しく述べている。総合計は五、八二七両ほどとなつていて。

測量回数	日数	幕府支給	忠敬負担	地元負担	根拠史料	参考
第1次	180	22・5両	77・25両	0	星学手簡	手当7・5匁×180日
第2次	242	40・3両	100両*	70両	器材準備	
1	忠敬支払いの人足、宿泊賃より積算：人足1里21文、本馬1匹1里42文、宿泊代忠敬150文、内弟子124文、下僕100文と固定して支払				船手配	星学手簡 渡船、船測の費用無視
*2	大谷は船費用を無視しているが、仙台領の船測の負担は膨大である。無視できる大きさではない。(渡辺)					

三、地元負担の規模

前項の費用には第5次測量以降の、地元側が負担した経費を含めていない。また、

第2、3、4次測量における地元負担見積額も十分ではないと考えている。

大谷氏は、第5次以降の地元経費について文化十一年五月九日に1泊した上野国甘樂郡宮崎村の経費をもとに、第5次から第9次測量までの2902日分の地元経費を推測しているが、これは余りにも杜撰だと思う。

過去十数年間の伊能忠敬研究会の調査と各地で発掘された史料にもとづいて、少しうまくして、地元負担の大きさを考えてみたい。

(一) 越後岩船町 伴田家記録より 第三次測量 1802年9月21日 一泊

測量回数	日数	幕府支給	忠敬負担	地元負担	根拠史料	参考
第3次	132	60両	なし		測量日記	旅行人馬無賃、宿泊は木銭、
米代						
第4次	219	82・5両	なし		測量日記	同上
計	351	142・5両	なし	107・5両*		

*3 第3次の地元負担は御証文人馬数どおり使用として、単価を次のように仮定して積算
人足5人、1里25文。長持ち1棹3人。馬3匹、平均1里50文。距離1100里、
銭6、500文=1両、合計60両。

宿泊は木銭、米代で僅かしか払わないが、普通に払つたら全部で250両にならうという。
250両=142・5両=107・5両。
超える以上の人馬、手伝い人足、宿泊代の差額などは、此の範囲にはおさまらなかつた
と思う。

幕府測量隊に昇格後の諸手当

測量回数	御扶持(米)	金	銀	筆墨代他
第5次	57・3石	601両	一一・八四三五貫	20両
第6次	48石	315両	八・〇一〇貫	10両余
第7次	82石	523両	一三・六〇〇貫	20両余
第8次	112石	697両	一九・一〇〇貫	30両余
第9次	20石	178両	一・五〇〇貫	10両
合計	319・3石	2314両	五四・〇五三五貫	90両
五四・〇五三五貫=789両(銀相場六八・五匁 高橋御用日記)、1石=1両				
総計	319・3両+2314両+789両+90両=3512・3両			

在府(地図制作中)の手当

文化3~4年 250両 文化6年120両 文化8年100両

文化十一年 200両 江戸残留組への手当 140両 伊豆測量後、忠敬病没まで500両。
没後地図完成まで5~600両 合計1810両。以上高橋御用日記掲載の1日当たり経費
より積算。

地図実測録の仕上げ筆墨代 300両 同上資料より推測。

参考

この記録には、公用旅行の木銭上分（内弟子以上）35文、下分17文、白米一升54文、一両は6620文である。一泊は5合が決り。茶代200文を出したという。

(二) 前田領の記録 第四次測量 約40日 1803年6月(加能史料研究第6号)

人数 43名（先払い1、道案内2、手伝い12、道具持3、荷物持25）
船 乗組10名（船3艘、てんま2艘）
その他 駕籠1、馬1 (3名)
人数計 56名（一日当たり人数）

(三) 尾鷲大庄屋の記録 第五次測量 1805年6月 5日間 (鹿児島県史資料一〇)

手伝 630人
宿舎他 455名（宿緊急隊150、賄人足50、下調べ30、大工掃除40、荷物積み回し43、道橋修理142）

(四) 赤穂の記録より 第五次測量 1805・十一月、6日間 (三重県史資料叢書2)

人数 793名（人足567名、船206、事前打ち合わせ20）、1975匁
宿舎 宿付き人数 368 一日61名

費用 手当659匁（手当297名、446匁、賄い430匁、器具借用91匁、食材26匁、魚類187匁、味噌11匁）

費用計 3549匁 一日あたり591匁（約9・9両）

(五) 広島藩 広島領四三泊、伊予領一四泊 計五七泊 三手分け (岩城島文書)

船 43艘（親船3、漕船33、小船3、道具船3、藩役人船1）
船手 197名（親船5名、漕船5、小船3、道具船5、藩役人船3）
人足 92名（宰領9、人足50、書取3、案内3、地理巧者3、他）
宿舎 25名（火廻り4、不寝番3、肝煎り2、給仕10、水汲み3、他）
人数計 357名（含 藩士3名、一日限り人足40名）

(入船山記念館館報7号より)

(六) 徳山測量 四日 濑戸内沿岸 四手分け (徳山毛利家測量御用意記)

人数 一手 村役人 12人、人足42人 四手合計216名
船（四手） 大型船23艘、漁船114艘、はしけ10艘、573名
人数合計 789名 四日間延べ 3156名

(七) 宇和島 大浦清家家文書 第六次測量 1808年 閏8月

手伝 811名
宿・他 109名 人数計 920名

(八) 天草の深海村（牛深市）の記録 第七次測量 一泊

人数 374名（本隊148、支隊80、その他146（代官供16、長持30、宿泊用品の運搬72名分「上8、中17（以上郡中持回り）、中15、下32（村用意）」予備60、駕籠8、他）（上田源大夫家文書）

参考 夜具72名分「上8、中17（以上郡中持回り）、中15、下32（村用意）」

(九) 舉母（豊田市）の記録 第七次帰路支隊の分 (鈴木家史料)

旅宿 108名（客館80、脇本陣28）
荷物運搬 150人 合計258名 本隊を含む合計 推500名 (鹿児島県史資料一〇)

(十) 種子島の記録より (鹿児島県史資料一〇)

人数 350名（忠敬隊130、坂部隊119、地元100）
人足 延べ 56981名 一日1075名

(十一) 対馬測量 五三日 二二四里 一日四・二里で、離島としては大変進捗が良い。

人足 延べ 191石5斗6升5合
米々々々 1貫684匁

(十二) 一日動員人数の比較 (宗家文書 測量御用記録より)

第三次	第四次	第五次	第六次	第七次	第八次
岩船町 85名	前田領 56名	尾鷲 217名、赤穂 194名、広島 357名、徳山 789名	宇和島 920名	天草 374名、舉母 500名	種子島 350名、対馬 1075名
馬々々々々 2249艘	馬々々々々 1542匹	馬々々々々 1日20匹			
船々々々々 一日四三艘					

四、地元負担の現在価格 (鹿児島県史資料一〇)

(一) 現在価格への換算方法

・測量協力した地元負担を示すには、支払った手当、購入した品代を示すのが分かりやすいが、データの収集が難しく、また無理に試算しても、一両を20万とみるか、30万と想定するか、現代の貨幣価値への換算率で大いに変わる。

・当時の一両は元文小判で金の含有量8・62g。金の時価四千円として三・五万円にしか当たらない。お米は、ほぼ一石一両という期間が長いが、いま一石の値は七・五万円くらいである。当時は物の値段が高くて、人件費が安かつた。

・いまは、物の流通が多くて価格が下がり、生活レベルの向上で人件費が高くなっている。負担の大きさを現代感覚で理解するには人件費で比較するのが分かり易いと思う。

・手伝いの人数には、宰領の村役人、船頭、測量人足、水主、料理人、道普請、不寝番、緊急隊、掃除婦など、生活と作業に必要なあらゆる職種が係わっている。これらの平均コストを決めるのも大変難しい。ただ、いえることは、何処でも、他の場所に負けないよう各職種それぞれ、一流の人材が登場していることは記録から確実である。

・現在の会社勤務の平均給与を年500万とすれば、勤務は月22日として年間264日、一日あたりは、一・九万円となる。これを整理が便利なよう二万円とする。

(二) 測量回数ごとの適用

・第一次測量においては、人馬にはお定めの賃錢を払っている。自由相場の半分といわれるが、払っているので、地元の負担はない、と考えていいだろう。

・第二次測量では、仙台領で大々的におこなわれた海上引綱の船費用は地元の負担と考られる。記録が見つかっていないので、規模は分からないが、最低二艘と測量隊乗船、

村役人の船を考えると四隻くらいでは、と推測する。舟子は5名位と考えると一日20名、海上引綱を30日として延べ600名となる。

第三次、第四次測量 実例が少ないので、平均して70名とする。

第五次～第九次 かなりのばらつきがあり、また部分的には無測量で旅行のみという区間も多くはないが存在する。掲載例すべてを単純平均すると、530名となる。少し多すぎるので、そのまま一律に適用する感じもあるが、最大と最小を除いた平均でも大きく違ないので、そのまま一律に適用する。

各測量回数ごとに集計すると次のとおりである。

区間	概況	測量回数	距離(キロ)	個所数	平均間隔米
熱海～下田	険しい海岸	第九次	八九・四三K	七一九か所	一二四M
黒崎～山家	長崎街道	第八次	四九・二K	四八九か所	一〇〇M
三宅島一周	離島の周囲	第九次	三〇・五六K	二五七か所	一一八M
四日市～坂下	東海道	第八次	三七・二K	二九九か所	一二三M
水口～三条大橋	同右	第八次	五一・〇K	四一〇か所	一二四M
梵天間隔の五区間平均					一一八M

第五次～第九次 二五六二日 一日五三〇人 一、三五七、八六〇名

(三) 地元負担現在価格の総合計

動員された總要員は、延べ一、三八三、〇三〇名と推定される。一名当たり二万円として、二七六・六億となる。

食材、器具使用料、宿借料などの物件費を別掲していないが、伊能隊員の食材などはかなりの御馳走をしても、総額的には大きくないだろう。むしろ動員手伝い要員の飲食の方が大きくなったと思う。一日二万円なら、食事込みでいいかとも考えるが、別掲しても一〇%か一五%だろう。伊能隊への設営も考慮して一五%と見込む。四一・五億円となる。合計は、三一八・一億円

五、幕府費用を含めた総費用

幕府支給の五、八二七両を現在価格換算については、テレビで同席した磯田さんはしきりに「一両三〇万といつてたが、堅く東大史料編纂所の山本博文教授のいつている二〇万で考えると、一、一億六五四〇万となる。

地元費用の三一八・一億円、と合計すると三一九・七億となる。他に当初忠敬自弁の247両を二〇万で換算して、四九四〇万がある。個人として勇気ある拠金であるが、約六六〇倍の投資を誘発したとなれば、効率はベンチャー企業なみである。

三三〇億を一両二〇万で両に引き戻すと、一六五〇〇両、大谷亮吉流のやま感で言つて、いる「一・三万両ないし二万両」という枠に入ってしまうのは残念であるが、致し方ない。

六、現在の計測器を使って伊能測量と同じ導線法で日本を測つたら

あまりの符合に唖然としたり、安心したり（大谷も言つているから）だが、大谷がやつてない試算をおこなつてみよう。現在の進んだ測量機器をつかつて、伊能流の導線法で日本を測つたらいくらかかるかを求めてみる。
故佐久間達夫さんの資料を使って、梵天を立てた個所数を確認し、ここにトータルステーションを立てて測量する。国土交通省の単金を使って測量チームのコストを求め、一日何か所出来るかを想定し、積算を試みる。

(一) 梵天を建てた個所数

佐久間達夫氏は会報59号で、測量下図が現存し、地勢・環境の違う五か所を抜き出して、針穴数を数え、梵天を建てた個所数を概算しているので、左にこれを示す。単純平均すると、梵天間隔は一八メートルと意外に長い。

区間	概況	測量回数	距離(キロ)	個所数	平均間隔米
熱海～下田	険しい海岸	第九次	八九・四三K	七一九か所	一二四M
黒崎～山家	長崎街道	第八次	四九・二K	四八九か所	一〇〇M
三宅島一周	離島の周囲	第九次	三〇・五六K	二五七か所	一一八M
四日市～坂下	東海道	第八次	三七・二K	二九九か所	一二三M
水口～三条大橋	同右	第八次	五一・〇K	四一〇か所	一二四M
梵天間隔の五区間平均					一一八M

輿地実測録によると、全測量距離は三八、七八七キロメートルであるから、一八mで割ると、梵天設置数は、三一、九万か所（約三三万個所）となる。

(二) 人件費の単価

国交省のHPから2012年の測量技術者的人件費単価を求め、チーム構成を考えて、測量チーム当たりの現場コストを想定した。

上級主任技師 四〇九〇〇円×二人
技師補 二一六〇〇円×二人

助手 二二二〇〇円×一人

(三) 所要日数と経費総額

集計すると、一日一チームあたり現場コストは一四六一〇〇円となる。

一日何か所が測れるか 車二台持つて、平均一八メートル離れた2地点間を次々に測つてゆくものとする。街道はいいとして、海岸線も道路は一応あると考える。一か所五分、七時間作業とする。したがつて、現場費用は、一四六、一〇〇円×三、九二八日＝五七三、八八〇千円となる。

東京から出かけねばならないが トータルステーションは、梵天間の距離と、方位を正視、逆視両方で測れ、緯度、経度もデータで記録されるから、梵天を立てる場所の設定以外は、誰がやつても同じ精度で計測できる。

東京から出かけねばならないが トータルステーションは、梵天間の距離と、方位を正視、逆視両方で測れ、緯度、経度もデータで記録されるから、梵天を立てる場所の設定以外は、誰がやつても同じ精度で計測できる。

合計一〇・三億円。意外に安い。一〇億で現代伊能図ができるなら、忠敬でなくとも

ボーンと出してくれる方がいそがしい金額である。

問題は海岸だと思う。道路が無い海岸に船を出してとなると、経費が増大し、能率はガタ落ちとなる。そのような部分が何%あるか、どのくらいコストがかかるか。忠敬も間違えたと反省しているのだが、現代でも同じようだ。地理院の二万五千を眺めて、忠敬が出掛けていて（測線がある）、船でないと測れない部分が何キロくらいあるだろうか。乞御教示。

忠敬旧宅雑録（四）

伊能 洋



先の東日本大震災により被災した文庫蔵を覆う上屋

門から旧記念館までの、現在、砂利が敷かれている広いスペースは昔の屋敷跡で、祖母（孝）からは火事で焼失したと聞かされていた。戦前から野菜や花が植えられていて、日常の台所は充分に賄える量と種類があつた。

因みに文庫蔵の周辺の地面も含めて、祖母が丹精して植えた植物を思い出してみると、野菜類では大根、蕪、

人参、里芋、甘藷、馬鈴薯、南瓜、胡瓜、まくわ瓜、玉葱、葱、韭、茄子、トマト、小松菜、京菜、辛子菜、水菜、ほうれん草、ピーマン、唐辛子、蚕豆、豌豆、隠元豆、十六ささげ、枝豆、小豆、紫蘇、茗荷、生姜などで一寸した八百屋並みの品揃えと言えよう。

草木では梅、ゆずら梅、桜、柿、つつじ、無花果、紫陽花、夾竹桃、芍薬、牡丹、菖蒲、アイリス、百合、桑、ぐみ、向日葵、金盞花、紅蜀葵、鳥兜、鶴頭、葉

鶴頭、桔梗、女郎花、ダリヤ、コスモス、サルビア、紫蘭、小菊、雪の下、現の証拠、秋海棠などが記憶にあり、中でも私の部屋の真下に咲いていた秋海棠には、子ども心に父母と離れての暮らしの淋しさを募らせたものである。

樹木ではことに文庫蔵裏手の大櫻が蝉のねぐらとして印象に残り、氏神さまの椎の古木はほんのり甘い実が、肉桂の木の細根と共に戦時中の子ども達の貴重なお八つとなつた。

都会育ちの私の野菜や草花に関する知識のほとんどが、忠敬旧宅の屋敷畠で学んだもので、貴重な体験だったと感謝している。三十年来続いている俳句の勉強にも、どれほど役に立っているか計り知れない。

それにしても今考えると町屋の娘として育った祖母が、お手伝いさんが居たにせよこれだけの屋敷畠の面倒をみながら、五十年に渡つての忠敬ガイドの仕事をこなして来たエネルギーには脱帽する他ない。

余談であるが、忠敬（タダタカ）の呼稱についてはかつて佐久間先生も述べておられるが、私の記憶では終戦（1945年）までの佐原では公の行事を除いて、ほぼチュウケイ先生であつたように思う。2000年から二年がかりで行われた朝日新聞社の百四十周年記念行事の「伊能ウォーク」全国一周あたりから、若い人が親しみを込めて「チュウケイさん」と呼ぶことが多くなつたような気がする。「タダタカ翁」「チュウケイ翁」も戦前は多かつたが、現在では聞かれなくなつ

た。佐原でも青年会議所など若手になると「チュウケイさん」が多く、今後はさらに増して行くであろう。愛称として目に角を立てることはないが、正しい読みがチュウケイだと思う人が増えるのは困つたものだ。

昭和初年の旧宅の有り様を四回に渡つて述べて來たが、現在記念館には三郎右衛門家の屋敷平面図が残されており、年代の確定には至っていないが、忠敬の孫の忠誨時代のものではないかと思われる。それによる部屋数が十五もあり、庭には築山などがある宏大な屋敷があつたことが見えるが、祖母の言うように火災により焼失したとなると、さまざま疑問が湧いて来る。普通なら火事が有つたとしてもすぐ再建するのではないか。母屋が全焼するほどの火災で店舗と書斎が無事だったのは何故か。記念館の平面図と現在の旧宅平面図とは店舗を除いて重ならない部分が多い、などである。

忠敬没後の三郎右衛門家の記録には、忠誨の死去、文政十年（1827年）以後、忠敬研究第六五号に海保英之氏が述べられているように、安政四年（1857年）伊能景文が海保家から十三代当主として家督相続を継ぐまで三十年の空白がある。忠敬学にはまだ不明の部分が多く、研究を進めるためには地道な調査の積み重ねが肝要であろう。

さて、やつと「伊能忠敬記念館」が設立される運びとなり、昭和三十六年（1961年）に屋敷畠の東側奥に待望の耐震耐火のコンクリートの収蔵、陳列庫が国、県、市の協力により完成したことを、六代目である私の両親、康之助、多嘉子は何よりも喜び肩の荷を下ろしたようだつた。

記念館はさらに進化し、高木啓司氏の貴重な寄付を新記念館基金として、平成十年（1998年）川向うの伊能茂左衛門家の屋敷跡に、学芸員二名を置いた本格的な市立博物館として現在の新記念館が開館した

のである。

妻、陽子が安藤由紀子さんと共に二十年に及んで解説、分類、整理して2006年にまとめた世田谷伊能家伝存「伊能忠敬関係文書目録」の内容も記念館に収めて頂くことが出来、平成二十二年（2010年）には1234点の忠敬遺品がまとめて国宝指定を受けたことで、何とか子孫としての任務の一端は担えたかな、と言うのが現在の正直な心境である。



解体中の書斎天井



解体中の書斎東側



解体中の書斎南側

書斎及び文庫蔵の解体作業を行つて現場を見せて頂くことが出来た。書斎や蔵をすっぽりとおおう上屋を被せての大掛りな再建作業に驚いたが、スナップを撮らせて頂いたので皆様にもご紹介申しあげる。

なお、この作業は平成二十六年三月完成予定の香取市の大事業の一つである。

四号に渡つて「旧宅雑録」を書かせて頂いたが一応今号で終了させて頂く。色々とご教示下さった方々に御礼を申しあげる。（了）

『訂正』
雑録の（二）で遺品二百十五点と史蹟指定の旧宅を佐原市（現香取市）に寄贈して云々と書いたが、旧宅と土地は佐原市に買い上げて頂いたのが正しく、不用意に筆を走らせたことをお詫びして訂正する。

—山武市植草における—

おびしや

江口俊子

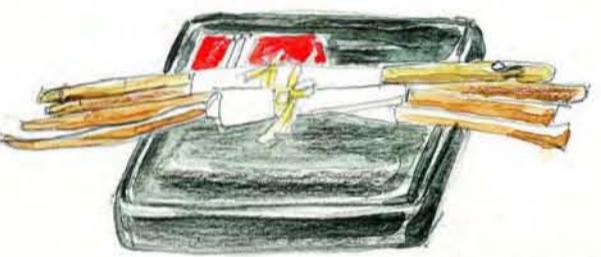
ここ千葉県山武市は忠敬さんと縁の深い土地なのです。山武郡九十九里町、横芝光町は誕生から少年期まで過ごされた所です。

私たち夫婦は十年前、畑仕事をするため、東京から引っ越ししてきました。

土地の方々と話していますと「おびしや」という言葉を話題にされます。「おびしや」なるものを、よそもの私は気にかかりました。本で調べましたら、(お



御嶽神社：(創建は1145年)の本殿に奉納された「おびしや」のお飾り。
昭和42年まで本来の「おびしや」の神事が行なわれたのが納められている。



オビシヤ 朴おくり
山武市 植草 2010.1.6

オビシヤ
山武市 植草
2010.1.6



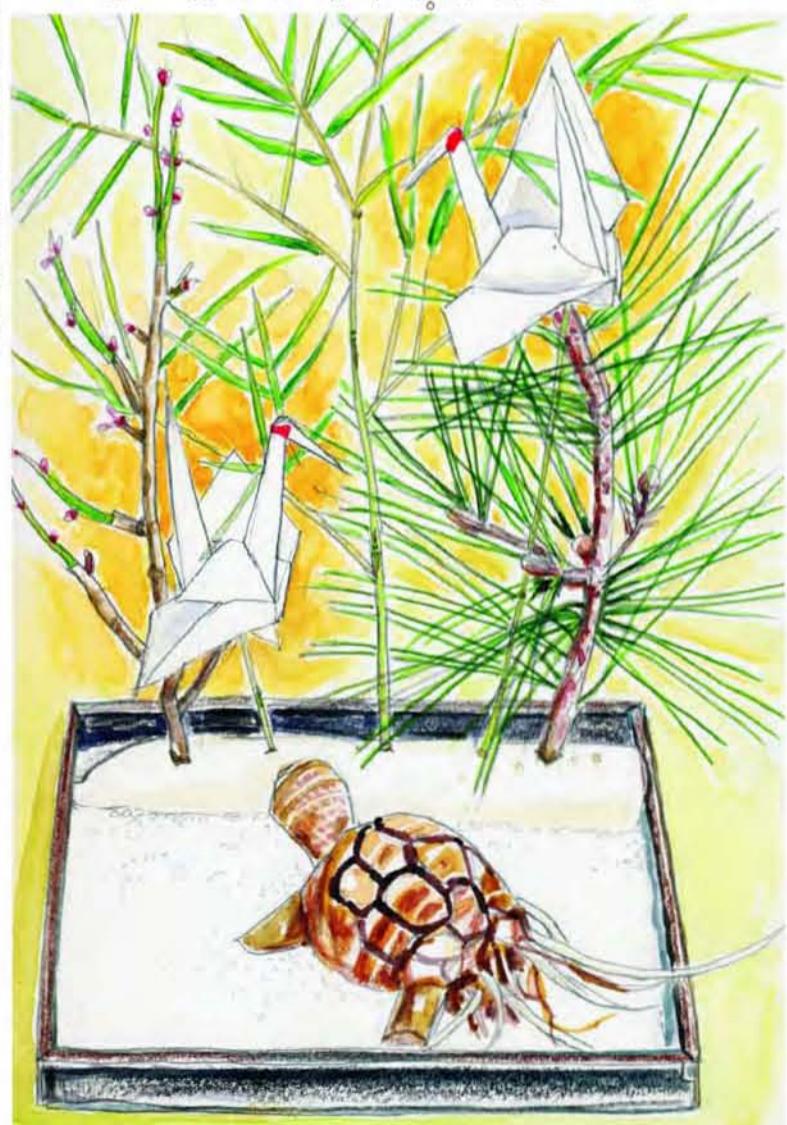
弓、矢は代々宿の作。
御神酒には「サンブスギ」を差す。

平成二十二年一月六日、山武市植草にある猪野家を訪問しました。猪野家は美林で知られる「サンブスギ」の山持の名家です。植草(戸数十八)でのおびしや行事は江戸時代頃からと言われています。

さて、猪野家のおびしやのお飾りを一目見て感激しました。竹で出来た弓矢は実にスッキリ出来ています。

た。私が絵に描いたお飾りは、地元の野菜を使って、遊び心がいっぱいです。しかも、すがすがしい作でした。一月七日、猪野家ではおびしやのお飾りを持って、山の上の御嶽神社に奉納されました。

(画は江口俊子氏)



蓬萊山(おびしやのお飾り)。松竹梅を支える大根、お米、亀は里芋、ゴボウなど地元の野菜で作られる。

福江市の伊能測量史跡 二題

渡辺 一郎

付添い藩士の労を思つて坂部は、きつい作業を続けて疲労し、体調を崩していた。

一、坂部貞兵衛墓地
痛恨 伊能隊副隊長 坂部貞兵衛 病没の地

伊能隊は五三日かかつて対馬を測つたあと、文化〇〇（一八一三）年六月二〇日坂部支隊は五島列島中央部の日の島に着く。忠敬隊は近くの奈留島だった。六月二十四日の忠敬の『測量日記』に、「坂部、風邪引籠もり」とある。坂部の病み始めである。

六月二十六日に坂部が日ノ島から忠敬に出した手紙が残っている。自分の病状が「はかばかしくないので、明日、日ノ島を引き払い、薬を変えたい」と思つてはいる。日ノ島でも、たいがいの薬を飲んだが、医者が敷医者なのと自分が不信心なので一向に効き目が現れません。そのうえ、ここは大家ですが古い家で、先日の大雨の折には座敷じゅう雨漏りして、寝るところに迷いました。両便所は一四・五間も離れており、高い縁をやつと降りて通う始末です。また、床のまわりを数万の蟻が歩行しています。日ノ島を早々に引き払い福江島に移つて服薬し、福江市中をお巡りの折りは間に合うようにと思つています。云々」とある。

坂部の病状はチフスではなかつたかといわれる。下痢も烈しかつたろう。悪い宿舎で、這うようにして不便な便所に通う坂部の苦しみが伝わつてくる。

六月二〇日に出した手紙では、「・・・付き添いの平戸藩士の出張が長引いて気の毒なので、無理に自分の組を二手に分けて、自分の足の痛みを我慢し、不服な小者をだましだまし、ようやくまわりましたが、私も老い込んで難所の岩石を飛び渡ることも難しくなりました」と弱音を吐いてはいる。

平戸領は、平戸島と壱岐、五島に散在し、六万石ほどの藩としては異例の百日におよぶ長期測量だった。

忠敬が出した危篤の届けは、約一ヶ月後に江戸に着き、五島藩の江戸留守居役が景保へ直接持参した。藩主も心配して、宿舎を町屋から武家屋敷に移し、家老や藩医を見舞いに出したが薬石の効果がなかつた。五島藩は、幕臣・坂部貞兵衛の死に対し、三日間、歌舞音曲の停止を命じて弔意を表した。忠敬は「坂部は病氣養生叶わず。福江町において命終わる」と簡単に記しているが、声が出ないほど落胆していた。

翌十六日の七つ時に葬儀を行い、福江町の淨土宗芳春山宗念寺に丁重に葬つた。坂部を失つて忠敬は、鳥が翼を失つたような大打撃を受け、作業中にまつたく隊員を叱らなくなつたという。

一ヶ月後に九州本土に帰り着き、「やつといつものとおり、ヘマをやつた隊員を叱るようになつて、よかつた」と内弟子らが忠敬の長女・妙薰に報じている。

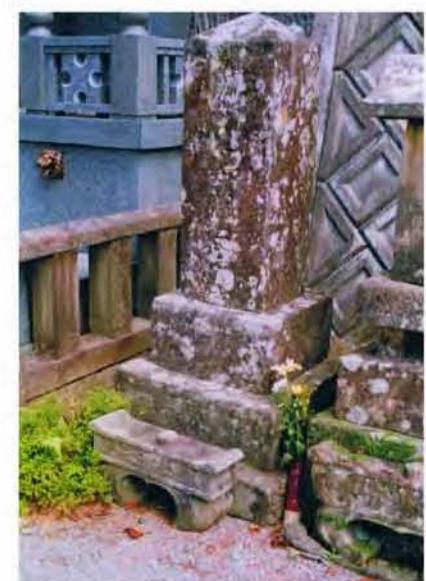


宗念寺
伊能隊副隊長・坂部貞兵衛の墓がある寺。
第22代藩主五島盛利が生母(側室)の菩提を弔つて建立。



福江城
手前の濠は海水の濠である。

坂部の墓周辺
左奥の突き当たりは、家老・又野家墓地。伊能忠敬測量日記文化10(1813)年6月29日の項に「此夜家老又野監物來て対談。五島侯へ万国略図一幅を上る」とあるそうです(的野圭志さん)が、清書本には見当たらない。現場で書かれた伊能忠敬先生日記に記述があるのだろう。



坂部貞兵衛墓
五島市指定史跡 平成11年1月21日指定。貞方家墓地内にある。正式な名前は坂部惟道、貞兵衛は通称である。御先手組同心であるが、数学を学んで天文方に出て、この時は天文方手付手伝(てつけてつだい。与力格)を拝命していた。伊能測量隊唯一の犠牲者である。

二、伊能忠敬天測之地 記念碑
五島市栄町の東公園南東角にある伊能忠敬天測記念碑。
一八一三年（文化一〇）七月、ここで伊能隊による天
測が行われました。碑の建立は福江出身の今道周一氏
(柿岡地磁気観測所初代所長) のご尽力によるもの。
(本稿の写真は五島市の的野さん提供です。坂部病没
前後の模様は、渡辺著「伊能測量隊まかりとおる」よ
り加筆引用)



伊能忠敬天測之地碑



松浦史料博物館（長崎県平戸市）
渡辺 一郎

約一七・八年ぶりに平戸の松浦史料博物館を訪れた。ツアーダラフたので、自由時間がとれるかどうか分からないので、アポをとらなかつたが、一時間近く時間があつて、ゆつくり館内を見学することが出来た。

十数年前に、ここに伊能図を撮影させていただくため、機材を積んで車で東京から平戸まで、長驅したことを想い出す。

島原で榎原史料館を見学したあと、午後、電話をかけて、東京から来て、いま島原にいるのですが、伊能図を撮影させていただけないかとお願いした。

いま館長をしておられる木田さんが主任学芸員で、明日は他の仕事があつてお相手はできないが、勝手に撮られるならどうぞ、といわれる。九州だけの小図もあるというお話だった。東京から車で撮影に来る者は無かつたとおもうので、興味をもたれたのだろう。

翌日、館長の松浦さんに挨拶。御子孫ということだつた。貸していただいた場所には伊能地図の巻物がずらつと並べてあり、どうぞ、ということだつた。入手経緯を記した副書（そえがき）もあつて、制作をお願いした経緯、お札の品、金額まで書いてあつた。

立派な副本で来歴も確か。経緯は研究会会報第九号に掲載し、江戸博の展示を始め、いろいろな場所で平戸伊能図を宣伝した。

旧平戸藩主松浦氏は嵯峨源氏を名乗る地域の豪族で、室町末期に平戸の領主として松浦隆信（たかのぶ）鎮信（しげのぶ）親子が出て、積極的に南蛮貿易をおこなう勢力を伸ばして徳川時代に平戸藩を確立した。

博物館の場所は、平戸がオランダ、イギリスとの貿

易中心だった時代の藩主邸跡で、石垣と階段は当時の形をとどめるという。

現在の建物は明治二六年に、旧藩主松浦詮（あきら）の住まいとして建てられた「鶴ヶ峰邸」で、謁見の間「千歳閣（せんざいかく）」が現在展示場となっている。

収蔵史料は代々藩主松浦家に受け継がれてきたものが殆どで、武具、什器、「松浦家文書」をはじめ重要な資料が保管展示されている。このなかに、伊能図が含まれる。

伊能図は常設展示されていないが、左記の諸図を藏する。すべて針穴本で貴重な伊能図群である。

文政四年小図
西国海路図
文政四年大図
大阪—備後
備後—博多
博多—長崎
平戸

（中図による瀬戸内の編集図）

文政四年大図編集図
堺岐
五島—小値賀
松浦—佐世保
二舡を接続



松浦史料博物館全景

建物は明治26年旧藩主の住居として建てられたが、この場所は、長崎の出島以前の、オランダ貿易が平戸でおこなわれていた頃の藩主の館の跡である。階段、石垣は当時のままという。



博物館の石垣と入口

博物館入口（左）。登り口（上）。館の石垣は見事（右）。



千歳閣内の展示室



千歳閣外観

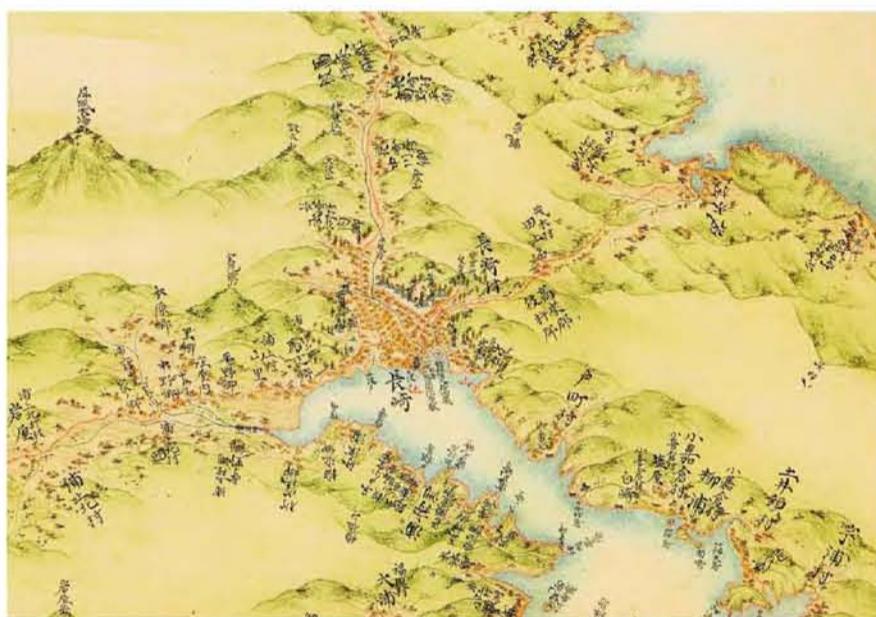
旧謁見の間で、内部は展示室となっている。手入れが行き届きかねると見えて、かなり傷んでいる。



①江戸から平戸への沿海風景図

江戸から平戸までの海路から眺めた絵巻が出ていた。
図は大坂の部分である。平戸藩主の参勤は大阪まで船で、
大阪から陸路だったという。
瀬戸内の両岸だけを伊能中図を用いて制作した西国海路図も所蔵する。

展示物より



秘蔵図(非展示)文政4年大図(長崎部分)・江戸博「伊能忠敬展図録」より



③渡來した台湾船

精密に描かれ寸法も入っている。



②松浦静山画像

松浦静山(まつらせいざん、平戸藩主、右)
真田幸貫(さなだゆきつら、松代藩主、松平定信の次男、中央)
大関増業(おおぜきますなり、黒羽藩主、左)
いづれも賢人大名で、徳川斉昭が屋敷に招いて描かせたという。

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第四回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎
編著 井上辰男

【第四次測量】(尾張及越前以東)自享和三年二月二十五日至享和三年十月七日

【表中赤色文字は改訂増補部分】

享和三年六月 (1803)

十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一	(7. 19)	中飯	白木浦	福井県敦賀市	同 敦賀市	同 敦賀市	
(5)	(4)	(3)	中飯	三国湊今町	石橋村	蓑浦	鮎川浦	小丹生浦	蒲生浦	上海浦	茂原村厨浦	米浦	同	河野浦	大谷村	大比田浦	杉津浦	(21)	中飯	赤崎浦	敦賀湊西浜町	同		
三国湊今町	福井城下境町	天管生村	布施田村	三国湊今町	石橋村	蓑浦	鮎川浦	小丹生浦	蒲生浦	上海浦	茂原村厨浦	米浦	同	河野浦	大谷村	大比田浦	杉津浦	(21)	中飯	赤崎浦	敦賀湊西浜町	同		
同 坂井市	同 福井市	同 福井市	同 坂井市	同 福井市	同 福井市	同 福井市	同 福井市	同 福井市	同 越前町	同 越前町	同 越前町	同 越前町	同	南越前町	同 南越前町	同 敦賀市	同 敦賀市	同 敦賀市	同 敦賀市	同 敦賀市	同 敦賀市	同 敦賀市		
布目屋三左衛門	松屋嘉右衛門	小木治郎右衛門	東門跡派	西畠山淨光寺	庄屋村井治太夫	新屋徳兵衛	青木庄左衛門	三田村七兵衛	一向宗雲晴山碧峰寺	玉屋九兵衛	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	中村治郎左衛門	北野仁兵衛	中山治郎左衛門	大庄屋	久左衛門	久左衛門	天屋弥三右衛門	国界に至る。界に小滝あり		
帰着。恒星測定	恒星測定	恒星測定	渡船、泥原新保浦へ相渡る	先触を出。	秀蔵・慶助は麻疹に付良助を添置。良助・郡蔵全快。福井城下迄	秀蔵・慶助になる良助病気	恒星測定(秀蔵、麻疹に付大兄一)	恒星測定(秀蔵、麻疹に付大兄一)	此日より大兄、良助病気全快出	恒星測定。秀蔵病氣	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	海岸大石、丸石おおく難歩行にて測。恒星	郡蔵麻疹盛なり。船にて測。恒星	久兵衛、吉兵衛は段々快方、外の病人共は籠又は舟にて止宿迄先へ送る。恒星測定	久兵衛、吉兵衛は段々快方、外の病人共は籠又は舟にて止宿迄先へ送る。恒星測定	久兵衛、吉兵衛は段々快方、外の病人共は籠又は舟にて止宿迄先へ送る。恒星測定	久兵衛、吉兵衛は段々快方、外の病人共は籠又は舟にて止宿迄先へ送る。恒星測定	久兵衛、吉兵衛は段々快方、外の病人共は籠又は舟にて止宿迄先へ送る。恒星測定	久兵衛、吉兵衛は段々快方、外の病人共は籠又は舟にて止宿迄先へ送る。恒星測定		
二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二十	二	二	二	二	二	二	

三	二	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十		九			
(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	中食 小休	(2)	休	(10. 1)	(30)	(29)	(28)	(27)	中食	(26)	(25)	(24)	休 糸魚川町
同	同	同	同	尼瀬町 宮川駅	荒浜村	柏崎町	鉢崎駅	同	同	同	潟町	今町湊	有馬川宿	名立駅 大町村	同	梶屋敷宿	
同	同	同	同	同	出雲崎町 柏崎市	柏崎市	柏崎市	同	同	同	上越市	上越市	上越市	同	同	糸魚川市	同 糸魚川市
同	同	同	同	京屋七左衛門	丁子屋彦治郎	大町問屋	恒星測定	同	同	同	田中権右衛門	新町伊右衛門	橋元善右衛門	同	弥右衛門	助左衛門	
忠敬病氣なし逗留。 渡海病氣も同じ。	忠敬病氣なし逗留。 恒星測定	忠敬病氣も同じ。 後國図を写す。	忠敬病氣も同じ。 後國図を写す。	忠敬病氣も同じ。 後國図を写す。	忠敬病氣も同じ。 後國図を写す。	忠敬病氣も同じ。 後國図を写す。	恒星測定	大風、病氣逗留 終日雨、病氣逗留	病氣不宣、逗留	恒星測定	忠敬病氣も重り止宿	恒星測定	量差障不届の段をわびる。 昨夜より糸魚川役人來り姫川測	雨天逗留、忠敬前日より病氣。 昨夜より糸魚川役人來り姫川測	同	無之旨申候。 所、八右衛門は勿論、一同一言	忠敬、昨夜より持病の痰發る。本 街道を行て姫川を渡り見るに、 流れは早けれど小河にて測量も易 ければ、流れに沿て海際へ行見れば、漸十間余にして、それ程の急 流にもあらざれば、測量の者を呼びて易く渡しぬ。仍て問屋八右 衛門並、宿役人を呼、今日海辺 測量先姫川渡し儀、手輕に相済 候所、甚大總に申立て、測量御用 差障不徳の段、相不當申聞候 所、八右衛門は勿論、一同一言 も無之旨申候。

二	一																				
(15)	(11)	中食																			
横堀村	塚原駅	須川町																			
同	同	群馬県みなかみ町																			
渋川市	みなかみ町																				
本陣問屋勘兵衛	名主権左衛門																				
恒星測定	恒星測定	猿ヶ京村、関所ある。																			
七八	七八	七九																			
			享和三年十月(1803)																		
				二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二	二十一	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	九	
				(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	(31)	(30)	(29)	(28)	(24)
				永井村	二居村	上湯沢駅	六日町宿	五日町村	浦佐村	堀之内村	川口村	六日市村	十日町村	長岡城下渡町	与板村	地蔵堂町	寺泊町	佐渡島新町	同	同	
				群馬県みなかみ町	同	湯沢町	同	南魚沼市	同	南魚沼市	同	長岡市	同	長岡市	同	長岡市	同	佐渡市	同	佐渡市	
				名主四郎右衛門	名主問屋兼帶 清左衛門	高橋仲右衛門	同	遠藤伝左衛門	若狭屋与兵衛	名主庄九郎	名主中林六郎左衛門	本陣細貝清兵衛	暦局より急御用状届く 糸魚川通行の件 忠敬、返書を出す	青柳屋利右衛門	前屋弥兵衛	大庄屋富取長太夫	彦根山興琳寺	一向宗東派	同	同	
				恒星測定	恒星測定	雨天逗留					恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	恒星測定	
				七八	七八	七七	七七	七七	七七	七七	七六	七六	七六	七六	七四	七四	七四	七五	七五	七五	

十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	中食	渋川村	名主 磯右衛門 弟分家要蔵	吾妻川、船渡し
（一） 25)	（一） 24)	（一） 23)	（一） 22)	（一） 21)	（一） 20)	中食 板橋宿	浦和宿	桶川宿	熊谷宿	中食 本庄宿	高崎城下元町	金古村 高崎市	同 渋川市
同	同	同	同	同	深川黒江町	東京都板橋区	同 江東区	同 さいたま市 浦和区	同 熊谷市	桶川市	埼玉県本庄市	同 高崎市	同 渋川市
同	同	同	同	同	忠敬隱居宅	高橋先生より御使管被下候。	星野屋新助	本陣竹井新右衛門	金升屋庄三郎	恒星測定	恒星測定	名主 磯右衛門 弟分家要蔵	吾妻川、船渡し
恒星測定	恒星測定	同	同	同	暦局高橋先生へ行。	午中太陽測定	暦局高橋先生へ糸魚川一件の巨 細書一通差上申候。恒星測定	高橋先生より御使管被下候。	恒星測定	恒星測定	恒星測定	名主 磯右衛門 弟分家要蔵	吾妻川、船渡し
		大工町桑原氏へ立寄、大手堀田 摂津守様へ上る。それより西丸 下、岩上氏へ立寄、佐柄木町、津 田候へ上り、帰る。				九十	八八	八八	八八	九四	九四	名主 磯右衛門 弟分家要蔵	吾妻川、船渡し

河崎倫代

今年は支部としての活動がほとんどできなかつた。しかし個人的には、小学生们たちに伊能測量を紹介し、旅先では“伊能交流”をおこなつた。これは、そのささやかな報告である。

珠洲(すず)市史跡めぐり

—珠洲つ子、伊能忠敬と出会う—

七月上旬、二週間にわたつて「珠洲市史跡めぐり」のガイド役を務めた。これは、市教育委員会からの依頼で一昨年から参加している。市内の小学校九校の六年生全員を対象に企画され、学校ごとにマイクロバスで市内の史跡をめぐる「ふるさと学習」である。珠洲焼資料館や須須神社（社叢は国指定天然記念物）、禄剛崎灯台（経済産業省認定 近代化産業遺産）、平時忠一族の墓（県指定史跡）などを案内する。

能登半島最先端、狼煙町にある能登ささいはて資料館（河崎個人の私設ミニ資料館）では、複製伊能図や測量日記解読版パネルなどで、郷土を測つた伊能測量隊の足跡をたどり、先祖たちとの関わりを考えた。六年生が「社会」の授業で伊能忠敬を学ぶのは二学期であるから、その予習を兼ねることになり、説明にも力が入つた。

珠洲市域は、伊能忠敬ではなくて弟子隊が測つたことを知つて、「ええつ」と残念がる様子や、ほぼ等身大の伊能忠敬像の前で“忠敬ポーズ”を取つたりするのを見るのも楽しい。生

徒たちのお楽しみは何と言つてもお弁当。狼煙湾を見下ろす禄剛崎台地でいただく。食後は、平山郡蔵隊が測量した足跡（？）の上を、駆けっこや鬼ごっこに興じる姿も見られた。



石川県版中図に見入る、みさき小の皆さん



忠敬ポーズ！ 直小の皆さん



大図と日記パネルで学ぶ飯田小の皆さん



奥能登すず塩田村で揚げ浜式製塩体験



複製伊能小図を囲む宝立小・上戸小の皆さん

先生方が学校ごとにしおりを準備して事前指導をされているので、生徒たちは活発に質問したり記録したり、丸一日（朝八時過ぎから午後四時まで）びっしりの行程である。私が小学生だった半世紀前には、市内全域を巡る機会はなく、郷土のことにはまったく無知だったから、文字通り隔世の感がある。郷土への誇りと愛着がさらに強くなるきっかけとなつてほしい。

史跡めぐりを終えた数日後、各校から生徒の感想文と礼状が届いた。中でも、正院小学校の皆さん全員からのハガキがどうんと郵便受けに入っていたのは驚いた。恐縮しつつも嬉しい気持ちを表わしたくて、夏休みに返事を出した。

すると、十月に入って、宝立小学校から大きな封筒が届いた。授業で作成したという六年生全員の「伊能忠敬調べ」が入っていたのでびっくり。担任の先生の計らいに感謝した。現代つ子らしく、インターネットのいろんなサイトから情報を得て、それを自分なりの関心で選び、構成し、感想を記している。ここを入り口として、次は「測量日記」を読み、郷土の伊能測量を現地からレポートするなど、中学校での研究活動にもつなげていって欲しいと、ついつい期待が膨らんでしまった。次に、生徒たちの感想・疑問の一部を紹介したい。

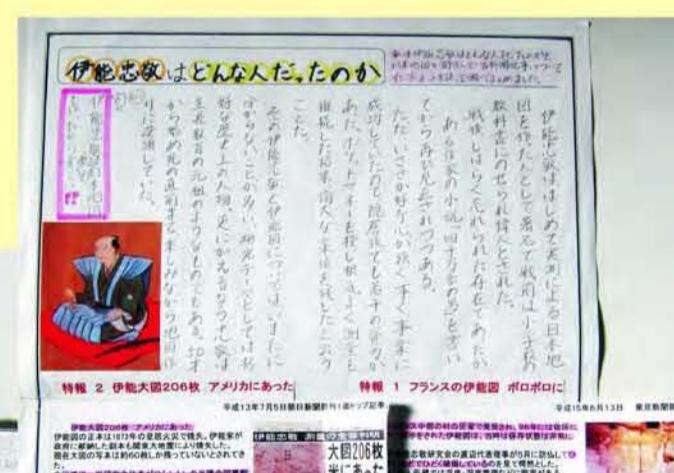
はじめは測量はかんたんなものと思っていたら、歩幅が一定になるよう訓練するところからはじまつたので、忠敬はいやだなあ、大変だなあと思わなかつたのかなあ。

伊能忠敬は一人で測量したのではなくて、伊能忠敬測量隊といわれるよう、忠敬を中心に行つたんだけだろう。沖縄や奄美大島に行つてないので、何

伊能忠敬は離れ島にはどうやつて行つたんだろ。伊能忠敬は、奄美大島に行つて忠敬を中心に行つたんだけだろう。伊能忠敬は離れ島にはどうやつて行つたんだろ。伊能忠敬は、奄美大島に行つて忠敬を中心に行つたんだけだろう。



正院小学校からの礼状



特報 2 伊能大図206枚 アメリカにあった



特報 1 フランスの伊能図 ポロボロに



特報 3 伊能忠敬の測量方法



特報 4 伊能忠敬の測量方法



特報 5 伊能忠敬の測量方法

萩測量と平山郡藏

今春、山口県萩市へ出かけた。家族の希望で選んだ旅先だったので、私自身、何か目的があつたわけではない。だが出発直前に、ふと思いつて『伊能忠敬測量日記』を開いてみた。すると、第五次測量の文化三年（一八〇六）五月二十五～二九日まで、忠敬は萩城下で連泊していた。取りあえず、前後を含む数日分の日記をコピーした。一昨年、「完全復元伊能図全国巡回フロア展」金沢工業大学の会場で撮った写真の中に萩城下があつたので、その部分をプリントアウトして出発。

「萩城下・伊能図を歩く」という目的ができた。

萩は、近世城下町の古い町並みが、私の住む金沢よりもずっと多く残っていた。伊能図に記された測線と現在の市街図の道路がほぼ重なり、測量隊の足跡が全行程たどれそうだ。伊能ウォーキングには最適な町といえよう。とは言え、宿所となつた「山形百合蔵」宅はなかなか探し出せなかつた。日記には「浜崎町本町」とある。萩城下の港町として栄えた浜崎町は、廻船問屋・海産物問屋・船宿・油屋・呉服屋などを営む豪商たちの店舗兼住宅が軒を並べていたという。平成十三年に国的重要伝統的建造物群保存地区に選定された。通りに面して「浜崎町並み交流館」があつた。浜崎地区の典型的な町屋である旧山中家住宅を観光客に無料公開している観光案内所だ。

係りの女性に「伊能忠敬が宿泊した山形百合蔵の子孫宅を探している」と話すと、ちょうどやつてきた知人女性が、自宅から『萩浜崎町人 山縣家文書』（一九七三年 萩市郷土博物館）という本を持つてきて、該当ページをコピーしてくださつた。（お返しに、測量日記の萩城下部分を差し上げた。）



萩市浜崎町 - 忠敬はここで4泊して、治療に専念したが…

測量隊が宿泊したのは「山縣本家」で、百合蔵はその八代目にあたり、文化十一年に没している。本家の屋敷地は特定できなかつたが、「吹上山縣」と称せられた別家は現在も浜崎町吹上地区にあり、その間口の広さに往時を偲ぶことができた。

萩市といえば、吉田松陰や高杉晋作、伊藤博文ら草莽の士を輩出した地として知られるが、近年は世界遺産登録を目指して「近代化産業遺産群」の整備が進められている。幕末に鉄製大砲の鋳造を試みた「萩反射炉」（国史跡）、長州砲を鋳造した「郡司铸造所遺構広場」など、とても興味深く見学できた。

ところで、萩近辺の伊能測量で特筆すべきは、萩諸島の測量であろう。弟子たちが船で各島々へ渡つて、手分け測量をおこなつた。萩市北方の笠山（標高一二二メートルの小火山島が陸繫島という地形を成していて、世界最小? の火口がある）展望台から間近に見える萩諸島は、東から大島、櫃島、肥島、羽島、尾島、相島の六島からなり、大島、櫃島、相

島には現在も人々が生活している。どの島も真っ平らで、日本海にはそぐわないような穏やかな光景だつた。今から二十万年から六万年前の火山噴火によってできた台地群が海に沈んで島となつたもので、噴出した溶岩が比較的柔らかだったので平坦な形になつたらしい。

ちょっとした伊能交流もできて、満足の萩旅行だつた。ところが今夏、『伊能忠敬の江戸日記』を読んでいてショックを受けた。平山郡蔵が、この萩測量時の不始末を理由に、忠敬から破門を言い渡されていたのだ。詳細を知りたくて、渡辺一郎著『伊能忠敬の歩いた日本』を開くと、「忠敬病み統率乱れる」という項があつた。

第五次測量中の四月三十日の測量日記には、「東河（忠敬）此日より病氣「瘧疾」とある。「おこり」はマラリア性熱病で、周期的に發熱し悪寒や震えが出る病氣だ。忠敬は測量には参加せず、次の宿所へ先行してそのまま床に就く、体力の消耗を少なくするために一所に連泊するなどしたが、完治に三ヶ月もかかつた。測量隊と別行動を取らざるをえなかつたその間に、幕府下役と直弟子のトラブルや地元世話役との摩擦が生じたらしい。

「江戸日記」中の郡蔵への「永の暇」申し渡し状（破門状）には、次のような不始末四点が記されている。

- ・長州奈古村で、出された料理を食べず、作
- ・買ひ物の代金を少なく支払つた。
- ・長州萩で、島々への渡船の用意が手間取り直しの料理に対してもあれこれ言つた。
- ・防州辺にて、書画などを無理に所望した。



笠山の展望台から見た大島（右）

前回の第四次測量では、能登半島西海岸手分け測量の責任者として、測量作業はもちろんのこと、地元情報を丹念に聞き取り日記にも国内旅行にお出かけの際には、測量日記と伊能図のチェックをお忘れなく！ 旅の楽しみが倍増し、土地の人たちとの予期せぬ「伊能交流」が生まれるかもしれません。

会員便り

川上
清さん

をがり部国精関 感若を分の巧係今じくまし生まきし現をは、演生た代示外あ四き。にす国の方と画生実に時されにるを無に、話おる出も伝か、は外お姿渡にたれど、國に喜さびん誇うがのの

前方めのさをN
までた大ん録H
の画K
の紅葉情報も間近かと存じます。
一気に秋が深まつてきました。
「ブレミア歴史館・伊能忠敬」
の紅葉情報も間近かと存じます。
日本地図の五五歳から、隠事業意欲と成り立つことから、多くの國居内に進むことになりました。

山浦佐智代さん
先日のBSNHKが放映した。「歴史館・伊能忠敬」を拝見しました。

卷之三

会員の藤岡健夫さん 御逝去

富岡八幡宮名譽宮司

案のム数年前に亡くされて、戸塚の老人ホー
ムで暮らしておられてました。寄付予定
の四点を拝見するため、家内と訪問し
ていただき、いいところだね
と話合つたことがあります。
まし研究会活動にも熱心に参加いただ
きました。御冥福をお祈りします。
合掌。（W）

W

*姫路市の三木敏品
を送つていただきま
す。伊能忠敬の測量支援
現代語訳を入れ出

*姫路市の三木敏明さんから切り抜きを送つていただきました。

新聞から

福田弘行さん
平成の忠敬研究に輝きを残した小島陽仁子、伊能久間達夫、安藤由紀子、伊能佐久間達夫、安藤由紀子、伊能伊能の記録が皆さんに残されています。これらは皆さんが後世に事実を正しく伝えるために記録を含めました。この表は未発表のもので、これまでに記録されたものと書簡などと書簡などを参考して作成されました。

(渡辺注　この部分は、確かに佐久間さん解説本では、よく分からぬ場所があります。長持ちに鍵を差す部分です。現在、佐久間さんの測量解説の校訂作業を始めています。第四次測量は、河崎さんが担当です)

渡辺さん！ テレビのなかでも輝いて見えましたヨ！ 私も見習いたいと思つていています。つまでも若く元気でお過ごし下さい。い

新入会員自己紹介

方枚名とをもつて結成した高齢者を中心とした会員組織であります。お手元に持参して下さい。

伊能忠敬 笹山領探索の会
会長 加賀尾宏一さん（篠山市）

の三 市記 錄 山村 明庄 寛屋 さん子 (84) 孫 がに 測 量 帰 途 の 測 量

測奥案を播伊
量組内役高砂古文書の会
量經路御通行付諸事控
測伊能忠敬測量隊を支えた
にによる播磨での測量の様子
伊能忠敬測量隊を支えた
（A4判、一二六頁）
が発行した
御測量古語訳
の現代語訳

に自家でみつけたもの。忠敬の足跡を
た。諸事控の写真と解説、訳を並べて
掲載、庄屋が描いた鳥瞰図三四点など
も掲載する。
50部発行、千円。
荒井店、石守店などで販売。

い力だたずし事實べん 表全N史して聴ム
まいきのして務演デ、この体H館た。十率で十
した良でもも局でイ宮の渡構Kの 一の放月
ただかす。ら長協ア内番辺成の歴視月高映四
。いつが満いの力のさ組にの擔代聴二いさ日
たた、足ま鈴を戸んはお相当三率十Bれに
皆とまなし木願村（W様思づ仕たさい。さ
）高跳に乘つて、送一、に史伊K
あてづが全に長崎に達さん会員がありまし
りいのり体コメの入江さ、工藤で、Sれと
がま評でとメに測量場面イ藤了代、歴まし視ア
とす価はしん。う。をなてトノさ、のノさた。
ご御いかはをん、のノさた。

BS歴史館「伊能忠敬」

視聽率
歷代三位

会誌『伊能忠敬研究』

原稿の作り方

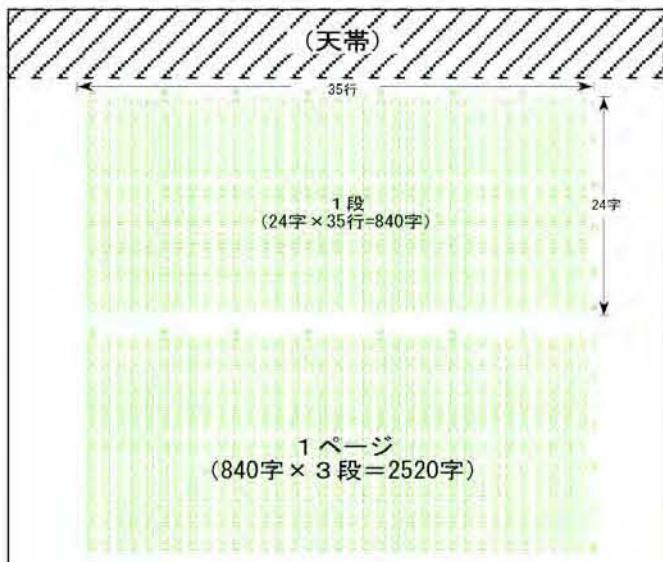
本誌は、第62号からカラー化され、第64号からはA4版になりました。

それに伴い編集方法も編集部がコンピュータ上ですべて自分で行い、印刷業者はそれを印刷・製本するだけ、という方法に変わりました。

カラー化・A4版化のメリットを活かしつつ、原稿執筆者の意図に沿うような誌面をつくることめざして、編集作業で様々な工夫をしていますが、まだ十分とはいえない。また、さらに

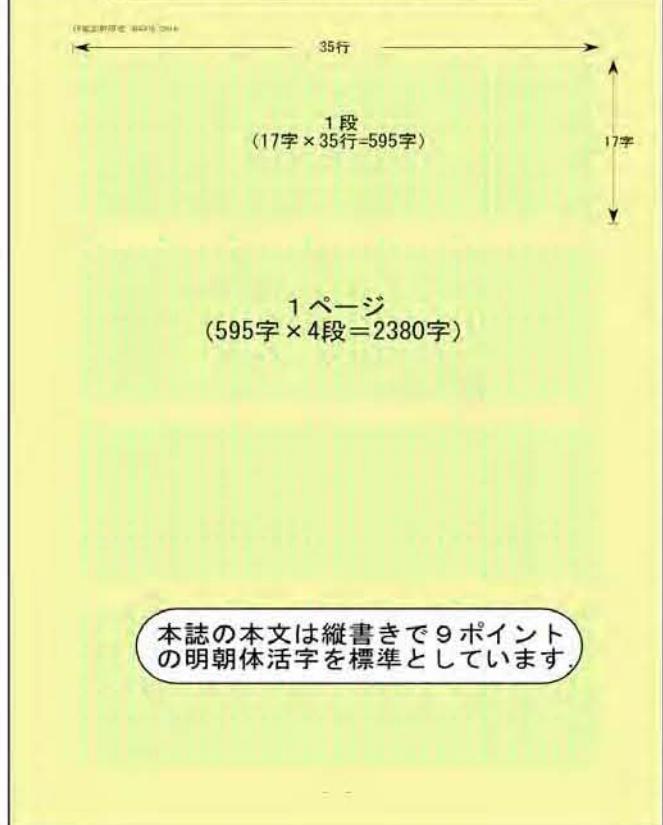
執筆者の中には、まだ十分にパソコンやインターネットの環境が整っていない方もおられると思いますので、必ずしも完璧に投稿要領に従う必要はありませんが、ある程度パソコン等においておられる方は、編集作業の効率化のためにも是非ご協力いただきたいと思います。

以下にQ&Aの形で説明いたしますが、この他にも細かいところでよくわからない、という方もおられるかもしれません。卷末ページに掲載されてい



グリーンとオレンジの天帯の頁は、3段組で、1段は24字×35行=840字、従って1頁は2,520字です。また、イエローページは4段組で、1段は17字×35行=595字、1頁には2,380字入ります。

いずれも、1頁あたり400字詰め原稿用紙6枚程度と考えてください。



本誌の本文は縦書きで9ポイントの明朝体活字を標準としています。

るメールアドレスまたはFAXで遠慮なくご質問ください。みなさまのご質問とその回答は、今後、会員・読者のページ（イエロー・ページ）であるべく紹介するようにしたいと思います。

Q1 「どのような内容の原稿を投稿できますか？

A 本研究会の趣旨に合致する伊能忠敬に関する内容ならば、どのようなものでも受け付けます。

現在のところ、下記のように大まかに四つのカテゴリに分けて掲載しています。

原稿投稿の際に、どのカテゴリに含まれる内容かを付記してください。

ただし、編集上の都合などでお申し出たいこともあります。毎号、巻末に「投稿要領」を掲載していますが、解りにくい、との声も耳にしています。

そこで、本誌に投稿する場合の原稿の作り方について、少し詳しく説明し、あわせて「投稿要領」の一部も改訂します。

- ①論文、調査・研究報告など（オリジナリティの高い内容の記事→グリーンの天帯のページに掲載）
- ②紹介記事、ノートなど（研究・調査の過程での話題、短報など→オレンジの天帯ページに掲載）
- ③各地のニュース、活動報告、お知らせ、など（会員の声を中心に→イエロー・ページに掲載）
- ④その他、グラビア（伊能図、関連史跡などの写真構成→黒色の背景色ページ）、資料（伊能測量隊の足跡を連載中→ライトグリーンの背景色ページ）など、適宜構成。

Q2 「原稿の長さはどのくらいにしたらいですか？

A 「投稿要領」にもあるように、一上り六ページまでが原則です。これより長い原稿は、分割掲載（連載）をお願いすることもあります。一ページ

あたり概ね二四〇〇～二五〇〇字程度の見当です（左図参照）。編集の際に文字間や行間を調整することも可能ですが、実際の字数は五～一〇ページ程度増えても問題ありません。ただし、表題や見出し、写真、図などのスペースも考慮しなければなりませんので、左図を参考に執筆者の側でも概略的な割付をイメージしておく必要があります。

Q3 「ページの割付についてはどのように編集者に指示したらよいですか？

A 写真や図を入れる位置と大きさを本文原稿中に次のページの例のように赤字で指示してください。

図の番号・名前・説明は、原稿末にまとめて記述してください。

なお、次ページの方法で割り付け用紙をダウンロードしたのち、具体的に

● 4段組割付用紙



● 3段組割付用紙



● 3段組割付用紙ダウンロード用URL

<https://dl.dropbox.com/u/59206159/INOHJ-A4-3.pdf>

● 4段組割付用紙ダウンロード用URL

<https://dl.dropbox.com/u/59206159/INOHJ-A4-4.pdf>

割付用紙(PDFファイル)のダウンロードの方法

下記のURL
(<http://dl.dropbox.com/>...)をコピーし、Internet Explorerなどで表示して指示に従ってダウンロードするか、バーコード機能付きの携帯電話かスマートフォンで左記のQRコードを読みとり、ダウンロードしたファイルをパソコンに転送し、印刷するなどして使ってください。

希望の割付を指定して、それをFAXまたはPDFファイル等をメール添付で原稿と一緒に送つていただきてもかまいません。ただし、誌面の都合でご希望に添えない場合もありますのでご了解ください。

【原稿での図などの挿入位置指定の例】

・・・・・広く利用の局面にふれるため、視野がさまざまに移動することから、まず、全体の流れを俯瞰した上で、個別の事情について紹介することとしたい。

利用の早い例として佐渡における大図の利用がある。
(図1 6cm x 8cm)

佐渡奉行所における『佐渡志』の編纂、幕府の命による天保期の佐渡国絵図などへの利用である。天保国絵図は天保七年(一八三六・三七)のことと時代もかなり下るが、『佐渡志』は文化十三年(一八一六)に完成しており、・・・・・

Q4 「原稿文中で使う数字は漢数字ですか？」

A 本誌は縦書きが標準ですので、年号などの数字は原稿段階でも全角の漢数字にしてください。ただし、文章や表中に多くの数字が引用される場合などは、煩雑で読みにくくなることをさけるため、横向き半角アラビア数字で表記してもかまいません。

単位についても同様に、漢字カタカナ併用(メートル、平方メートル、平方㍍、など)と横向き半角アルファベット(cm kmなど)の表記があり、どちらでもかまいませんが、一つの原稿内ではなるべく統一して使用してください。英文引用は横向き半角アルファベットになります。

Q5 「原稿は縦書きにする必要がありますか？」

A 縦書きでも横書きでもかまいませんが、数字などはQ4のAに準拠してください。また、句読点も、と。にしてください。

Q6 「写真や図の電子ファイル化はどうにしたらよいですか？」

A 本文と違つて写真や図は編集段階で修正することがほとんど不可能です。そのため投稿要領にあるように「印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明な」写真や図が要求されます。ppiというのは一インチあたりの画素子(ピクセル)の数を示す単位です。

この場合には一インチに三五〇個の画素子が点々と並んでいることを表しています。一平方インチ(約六・五平方センチメートル)の面積の画像には $350 \times 350 = 122,500$ 個の画素子が詰まっています。この数が大きいほど解像度が良いことになります。また、ppi値が同じであつても想定した印刷サイズ(面積)が大きいほど画素子の数は多くなり、それだけ電子ファイルの大きさ(バイト値)も大きくなります。

以上のことを念頭に置いて、デジタルカメラで撮影する場合と、スキヤナで読みとる場合に分けて説明します。

①デジタルカメラの場合

例として、印刷誌面で100mm × 75mmの

写真を掲載したい場合を想定します。

1インチは約二五・四ミリメートル

ですので印刷写真的大きさは約 4×3 インチです。タテ・ヨコそれぞれ

350ppi以上必要です。この印刷サ

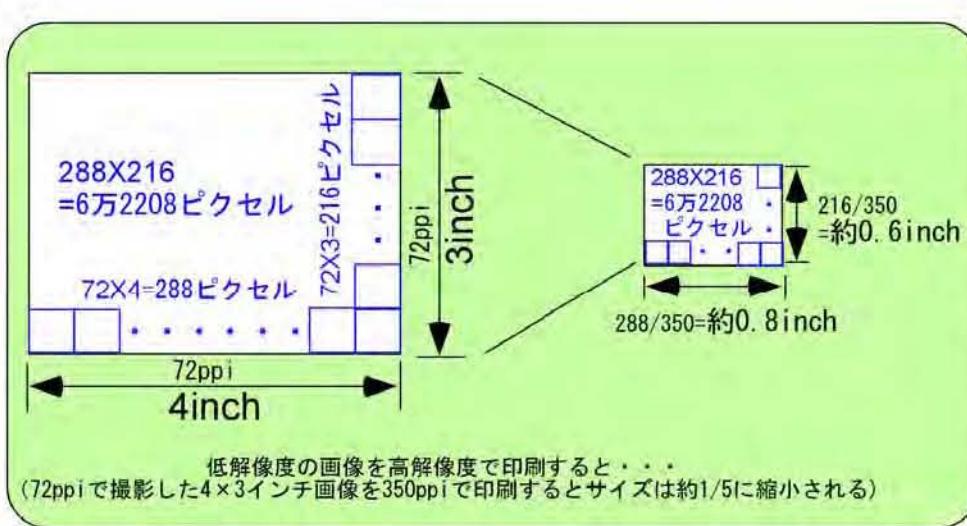
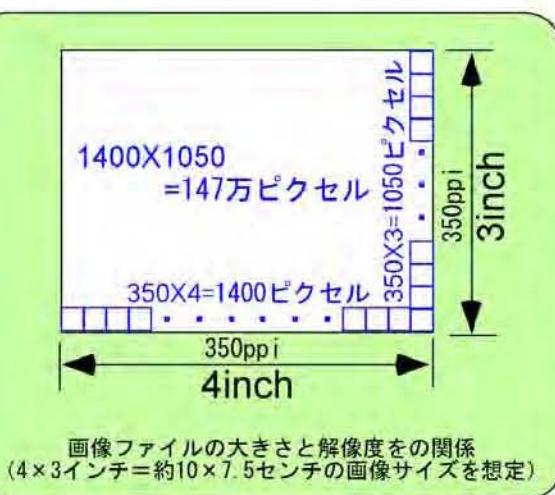
イズには最低でも $(4 \times 350) \times (3 \times 350) = 1,400 \times 1,050 = 1,470,000$ (約一・五メガピクセル)のサイズの画像が必

要になります。たいていの場合、編集段階で大きな画像を縮小して所定の大

きさにしたほうがきれいに仕上がりま

すので、計算した値よりも一・五倍か

ら二倍程度のサイズの画像を送つてい



ただいた方が無難です。

多くのデジタルカメラで静止画像サイズが選べるようになっていますが、5M（メガ）ピクセル程度（ 2592×1994 ピクセル）に設定して撮影すれば、印刷サイズでA4まで可能ですので丈夫です。ただ、VGAと呼ばれるeメール添付用の画像サイズ（ 640×480 ピクセル）は避けてください。また、カメラ付き携帯電話で撮影した写真も避けた方がよいでしょう。

解像度は2400dpi程度までだと思います。スキャナは走査線上を連続した点で読みとつていきますので解像度の単位は一インチあたりのドット数 (dpi) です。スキャナに付属した操作用アプリケーションでその調整は可能です。

るような大きなファイルは送
とが多いようです。その場
CDに焼くなどして編集部ま
でください。その際にメール
送付の旨を送信してください。

A 本文中で引用した文献や図・写真については、その出典が解るよう明記してください。

撮影した画像は、通常JPEGと呼ばれる画像ファイルに圧縮されて保存されます。5Mで撮影した画像のJPEGファイルサイズは撮影条件にもよりますが、通常は4Mバイト前後です。

となります。600dpi程度が無難でしよう。元図を拡大して掲載したいときには相応に読みとり解像度を上げてみるとキヤンします。タテ・ヨコ二倍（面積で四倍）にしたいときには700dpi以上、

ります。前ページの割付用紙のダウンロードはこの方法です。詳しくはそれぞれのクラウドサービスのホームページで確認してください。

Q9 「『伊能忠敬研究』誌に掲載後の著作権の扱いはどうなりますか?」
合は出版社から引用・転載の許可を取つておいてください。

でPhotoshopなどのソフトを使って画像処理と保存を繰り返しているうちに、いつの間にか72ppi程度まで画質が落ちてしまふ、という点です。これはJPEGファイルの宿命で、パソコンのディスプレイで見ていく場合には違和感がありますが、印刷画像にするには元画像の五分の一程度の大きさでないと同じ解像度を保てなくなってしまいます。画像処理ソフトでJPEGファイルとして保存する場合には、印刷サイズを想定して350ppi以上になるようあらかじめ設定しておくようにしてください。

きくするとスキヤンに長い時間がかかります。また、カラーと白黒で異なりますが、画像ファイルサイズも大きくなります。

なお、スキヤンする元画像は表面にゴミやホコリ等のない鮮明なものを用意してください。絹目の印画紙もスキヤンには不向きです。

スキヤンされた画像は、通常はJPEGかアクロバットのPDFファイルとして保存されます。本誌編集部ではどちらのファイル形式でも対応できます。

Q7 「原稿や画像のファイルはどのように送ればよいですか?」

②スキヤナで読みとる場合

紙焼きした写真や手書きの図などをスキヤナで読み取る際の方法と注意点について述べます。

Q7 「原稿や画像のファイルはどのよ

A メールに添付して投稿要領に記載されているアドレスに送つていただければよいのですが、3Mバイトを越え

倉沢剛（一九八三）『幕末教育史の研究』一八五
一八六（文末に注番号順にまとめてリストアップ）

すが、転載部分を明記して本会事務局までご連絡ください。

・・・・・分界、領分等は入れない、カラフト島も
含む全四鋪の刊行と、前記のとおり、「官板実測日本地図」
が書肆等へは出さず、開成所に願い出たものに払う
下げるという決定が下されるという紆余曲折があつた。
(福井一九八五)
よく知られているように、『官板実測日本地図』
は慶応三年(一八六七)のパリ万国博覧会に出品され
ている。
「徳川民部大輔歐行一件附録 卷十一⁶⁾」の博覧
応会出品品皇國地圖は、小栗上野介等による、慶
じまる二年正月付の件は、地圖出呈に關する上申では
ある。

Q8—引用文献や参考文献の表記は

Q9 「『伊能忠敬研究』誌に掲載後の著作権の扱いはどうなりますか?」

に、本誌に掲載された記事は原則としてすべて伊能忠敬研究会に帰属いたします。これは、今後、電子化された本誌をイノペディア等で公開することを前提にしたもので、他の学会や研究会の会誌の例にならった措置です。

分界、領分等は入れないカラフト島も
が書肆等へは出さず、開成所に願い出たものに払
あいつた（福井一九八五）。

よく知られてゐるよう、『官板実測日本地図』
ては慶応三年（一八六七）のパリ万国博覧会に出品され
てゐる。

（徳川月国民部大輔歐行、一
・廿地圖
・三日付件の地圖
・廿一件附地圖
・三小件附上品
・廿出栗上野
・廿閏介等による上申
・三卷十（六）の博覽
・正二年の慶応

Q9 「『伊能忠敬研究』誌に掲載後の著作権の扱いはどうなりますか?」

なお、特に図や写真などを引用する場合は原稿執筆者の責任において予め原著者または所有者、商業出版物の場合は出版社から引用・転載の許可を取つておいてください。

『伊能忠敬研究』投稿要領

伊能忠敬研究会御案内

①原稿の長さ

論文・報告・紹介などは本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり六頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。
*刷り上がり一頁に入る文字数は約2400～2500字(840字×三または段600字×四段)です。長い原稿の場合は連載として分割してくださいともあります。

②原稿のかたち

- ・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。
 - ・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。
 - *印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによいで5Mbyte以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真是無理な場合があります。
 - ・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEGフォーマット）にしてください。カラー数の少ない図はGIF形式のフォーマットでもかまいません。

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておいてください。

送り先

- ・電子メール添付の場合は inohken_kaishi@kolanet.ne.jp
・郵送の場合 H-153-0042 東京都墨田区青葉台4-1-6日本地図ヤマトへ送る

黒区青葉 4-9-6 日本地圖七夕一2階
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④ 注意事項

- ・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持つて許可を取つておいてください。
・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があつた場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとつておいてください。

四、事務局所在地

〒153-0042
東京都目黒区青葉台4-9-6

日本地図センター2

能忠敬研究会

電話・FAX

郵便振替

卷之三

会關係六一

○「InoPedia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典

<http://www.inopedia.jp/>

○ 伊能忠敬研究会・資料室 現存する伊能図の所在一覽 アメリカ 買
史料 <http://members.jcom.home.ne.jp/ieno/index.html>

○ [伊能忠敬図書館] 忠敬関係の文献、画像資料
<http://www.titrim.or.jp/>

卷之三

編集後記